研究報告１　鯖江の「おこない」神事

鯖江市教育委員会文化課

はじめに

「おこない」とは鯖江市東部とその周辺にみられる、厄年の男性が厄払いのために餅をまく行事である。現在、多くの集落では１月に開催されているが、戦前には旧正月の２月におこなわれるところが多かった。また、現在では土日祝日に開催されることが多いが、もともとは集落ごとに日が固定しており、この日は年始日・年頭日、礼日などとして認識されていたようである。

「オコナイ」という行事の名称自体は、越前地域では中世の文書に散見されるが、行事の内容がわかるような史料はない。また、近世の文書にも乏しく、どのような経緯で、いつから鯖江市東部で「オコナイ」がおこなわれるようになったのか、また、当初から厄年が餅まきをおこなう行事であったのかどうかなど、ほとんどわかっていない。しかし、地元ではこの行事の由来に関してさまざまな伝承が残されており、地域の伝統行事として今日まで伝承されてきた。

鯖江市教育委員会文化課では、平成25年3月に北中山・河和田地区の区長会長・公民館長の連名による文化財指定を目指しての調査要望を受け、平成 25・26 年度に悉皆調査をおこなった。本稿はその調査報告である。

１．調査の方法

調査は鯖江市教育委員会文化課文化財グループの職員が、鯖江市文化財調査委員会の指導と協力を得ておこなった。各集落において、現地での参加・観察と聞き取り調査、写真・メモによる記録をおこない、調査終了後に集落ごとに調査記録を作成した。調査範囲は鯖江市河和田・北中山地区としたが、尾花町の「殿上まいり」についてはすでに平成18年に市の無形文化財に指定する際、事前調査がおこなわれていたため、今回の調査対象からは外した。また、現地調査終了後、調査範囲外でもかつて餅まきをおこなっていた、もしくは現在も行っている集落があるということが判明したため、これらについても可能な限り聞き取り調査をおこなうこととした。各集落における報告の文章は、各調査員の作成した調査記録をもとに編集した。

また、現地調査と併せて区有文書類の調査もおこなった。まなべの館所蔵のマイクロフィルムがあるものについてはその複製本を使用し、片山町および磯部町については現地で写真撮影をおこない、それらをもとに室内で解読・分析をおこなった。

２．各集落における事例①（現地調査報告）

（１）別司町八幡神社

現在は成人の日（1 月第 2 月曜日）に実施しているが、これは参加者の仕事の都合などにより 10 年ほど前に変更した。かつては 2 月 7 日開催であったという。

行事の主体となるのは厄年男性（25歳）で、担当班、神社の役員らとともに準備をおこなう。餅の準備は例年12月末に厄年が半俵、町内から１升の米を持ち寄り、餅屋に依頼して前日までに作る。餅は直径 50cm ほどの薄い円形のおかさ、「まゆ玉」と呼ばれる三つ又になった栗の木の先端と幹に餅をまきつけたもの、長さ 50cm ほどの長方形の伸餅、直径10cm ほどの小さな円形の小餅を作る。時計などの絵が描かれた絵餅も作る。おかさとほぼ同じ形で厄年の人の名前を書いたものもあり、これは「厄餅」と呼ばれる。

当日は午後１時、児童センターに厄年男性（25・42・61 歳）と役員が集合し、神事の説明を受けた後、記念撮影等をおこなう。１時 45 分、神社総代を先頭に神職、厄年男性の順に並び、徒歩で神社へ移動し、2 時から神事をおこなう。神事の参加者は、宮総代・役員・厄年男性（25・42・61 歳）・厄年女性（19・33 歳）で、厄年の人のうち出席できない人は代理の者が参加していた。神事は、新年祭の祝詞→大榊による参拝者のお祓い→厄除けの祝詞→玉串奉納（宮総代→役員→厄年）、の順序でおこなわれる。

社殿での神事

神社での神事と同時に、担当班の人たちが「厄餅」を入れた桶を竹棒で担ぎ、「まゆ玉」を載せたトラックと共に町内を回る。このとき、町で制作した「おこない音頭」をトラックの拡声器から流し、一軒一軒に酒とするめをふるまいながら神社をめざす。かつてはバスや車を止めてふるまっていたというが、今はしていない。3 時すぎから正月飾りを燃やす、どんど焼きもおこなわれる。神職によるお祓い、祝詞の後、火がつけられ、餅まき終了後に当番が消火する。どんど焼きが始まる頃には町内をまわっていた一行が神社に到着し、餅まきの準備を始める。

餅まきは拝殿前の広場において3時20分からおこなわれる。餅をまくのは厄年男性（25・42・61 歳）と宮総代で、前宮総代による注意事項の説明の後、お祓いがおこなわれ、宮総代の拍子木を合図に餅まきが始まる。はじめに、「まゆ玉」の枝を折ったものを１人２本づつまき、次におかさ、小餅の順にまく。最後に再びおかさ、小餅の順にまき終了となる。なお、42 歳は「青餅」と呼ばれる緑に着色した餅も、61 歳は「紅餅」と呼ばれる赤に着色した餅もまく。餅は石垣の上から下の広場へまくが、青年団が石垣を登ってくるので、おかさはそこに向かってやさしく投げるのがきまりなのだという。

厄餅の入った桶を運ぶ

まゆ玉

別司町の「オコナイ」に使用される「まゆ玉」は稲穂をイメージしたもので、五穀豊穣を祈るためのものと、長方形の伸餅は反物をイメージしたもので、羽二重織物が盛んだった頃の名残と伝わっている。

（調査日：2014 年 1 月 13 日　調査者：深川・小林）

（２）河和田町敷山神社

１月の３連休頃に実施している。

１週間ほど前に桟敷の組み立てをおこない、餅は３日前に餅屋で厄年の年ごとに搗いてもらう。

当日は１時 30 分から神社で神事をおこなう。参加者は敷山神社奉賛会長（区長）・副区長・前会長・神社委員・宮当番・青壮年会・漆器商工組合会長・農家組合長・厄年男性（25・42・61 歳）・厄年女性（19・33 歳）で、計 20～30 名ほどである。神事の流れは壁に貼られている祭式次第によると、修祓→宮司一拝→開扉→献饌→祝詞奏上→玉串拝礼（神社および区の役員→宮当番→青壮年会→漆器商工組合会長・農家組合長→厄年）→撤饌→閉扉→宮司一拝、の手順でおこなわれ、続いて宮司と奉賛会長の挨拶がある。所要時間は約１時間である。

続いて厄年が河和田町に対して奉納したものが、拝殿内にて参加者にふるまわれる（祭式次第の直会にあたるものと思われる）。奉納物は 61 歳が酒とするめ、42 歳が酒と蒲鉾（ちくわ）、33 歳が酒とみかんなどである。3 時 40 分頃終了となる。

4 時から拝殿前の広場にて餅まきがおこなわれる。まくのは厄年男性（42・61 歳）である。宮司によるお祓いの後、はじめに 25 歳の厄祓いのため、梅の枝に刺した小餅（「ムラノモチ」と呼ばれる）をまく。この「ムラノモチ」は必ず 25 歳が拾わなければならないとされている。続いて 25 歳が餅まきの餅を担いで境内を走る。これも厄祓いのためだという。25 歳の厄祓いが終わると一般むけの餅まきが始まる。七福神の絵餅は最初に、おかさは中ほどに２回まかれた。なお、42 歳は白い小餅、61 歳は紅色の小餅をまく。餅まき後には子どもむけの菓子まきがある。所要時間は 20 分ほど、参加者は 200～300 人ほどである。

敷山神社の「オコナイ」は「厄祓い」とも呼ばれ、新年の行事ではなく歳旦祭の次にある厄祓い神事であるという。

（調査日：2014 年 1 月 12 日　調査者：藤田）

神事

（３）苅生田町八幡神社

かつては１月 17 日に実施していたが、３年前に１月第３土曜日に変更した。

餅は、かつては宿を決めて米洗い・餅つきをおこなっていたというが、現在では厄年が餅屋に手配して前日に購入している。

当日は２時 30 分から神社で神事をおこなう。参加者は区長・神社役員・厄年男性（25・42・61 歳）・厄年女性（19・33 歳）ほかである。神事は、祝詞→玉串奉納（区長・神社役員→厄年→その他の参加者）、の手順でおこなわれる。終了後に拝殿で酒を飲む時間がある。神事終了後、3 時 30 分から境内にて正月飾りやお札を燃やす、どんど焼きがおこなわれる。

続いて４時から餅まきが始まる。まくのは区長・神社役員・厄年男性である。拝殿の下に段があり、そこから下の広場へまく。はじめに厄年の家族（男性）が拝殿に置かれていた餅入りの桶を餅まき場所まで持って降りる。餅をまく人は段上に整列する。次に区長が拍子木を打ち鳴らす。次第に間隔が短くなって

いき、最後の１回を合図に餅をまく。直径30cm ほどのおかさを１人１個ずつまいた後、小餅をまく。これを 2 回繰り返す。小餅の中には紅色のものもあるが、これは 61 歳がまく。なお、拍子木の前に神事をおこなう習慣だというが、今回は手違いか神職は参加していなかった。参加者は 50 名ほどである。

なお、莇生田町の「おこない」とどんど焼きは新年祭と同じ日におこなうと昔から決まっているのだという。また、かつては餅を宿から神社まで、青年団が運び上げたという。

（調査日：2014 年 1 月 18 日　調査者：前田・藤田）

（4）片山町八幡神社

かつては 1 月 10 日に実施していたが、平成に入ってから祝日法の改正によって 1 月の 3 連休が定まった頃、1 月第 2 月曜日に変更した。

餅は事前に厄年が餅屋に手配し、前日に購入している。かつては宿を決めてその家で米洗い・餅搗きをしていたが、次第に宿はなくなり、公民館でおこなうようになったという。なお、片山町では大黒さんの描かれた絵餅を作るが、この絵は蒔絵師・沈金師に依頼して描いてもらっている。

当日は午後 1 時 30 分までに公民館に厄年男女が集合し、神職を先頭に神社へ向かう。２時から神社で神事がおこなわれる。参加者は区長・神社役員・厄年男性（25・42・61 歳）・厄年女性（19・33 歳）ほかである。神事は、祝詞→玉串奉納（区長・神社役員）→祝詞→玉串奉納（厄年→他の参加者）、の手順でおこなわれる。神事の後に拝殿で酒を飲む時間がある。

4 時から餅まきがおこなわれる。まくのは区長・神社役員・厄年男性（25・42・61 歳）・厄年の子ども・神職である。はじめに神職が拝殿下の段の中央に立ち、四方のお祓いをおこない、餅をまく人はそれに合わせて拝礼する。続いて自警団の男性が拍子木を打つ。だんだん間隔を狭く打つようになると餅まき開始の合図。拝殿下の石垣の中ほどに造られた段から下の広場へ、直径 30cm ほどのおかさ、大黒さんの描かれた絵餅、小餅の順にまく。これを２回繰り返す。小餅の中には紅色のものもあるが、これは 61 歳がまくことになっている。餅まきの後には子どもむけの菓子まきがある。所要時間は 15 分ほど、参加者は 300 人ほどである。

餅まき

片山町の「おこない」は昔から新年祭と同じ日におこなっていたという。なお、新年祭は「参賀式」とも呼んでいる。餅まきの時間を午後４時としているのは、かつて平日にもおこなっていた名残で、学校から帰った子どもたちが間に合うようにしたのだという。同日に左義長もおこなっているが、これは最近始めたことなのだという。

過去の神事の記録は「神田帳」と呼ばれて保存されており、毎年 6 月に虫干しするという。

（調査日：2014 年 1 月 13 日　調査者：前田・小林）

（5）西袋町熊野神社

1 月第 2 日曜日に実施している。かつては旧暦 2 月 9 日だったが、新暦になってから 1 月 6 日になり、平成に入った頃から参加者の都合などにより変更した。

餅は厄年が事前に餅屋に手配しておき、前日に準備する。かつては宿を決めて米洗い・餅搗きをおこなっていたという。厄年がいない年は、町内で餅を用意してまくという。

当日は 1 時 30 分から神社で神事がおこなわれる。参加者は区長・神社役員・厄年男性（25・42・61 歳）・厄年女性（19・33 歳）ほかである。神事は、祝詞→玉串奉納（区長・神社役員→厄年→他の参加者）、の順序でおこなわれる。神事の後に拝殿で酒を飲む時間がある。

餅まき

4 時から餅まきがおこなわれる。まくのは神社役員・厄年男性（25・42・61 歳）・厄年男性の家族である。餅は拝殿前から玉垣越しに下の広場へまく。自警団の男性が拍子木を打ち、だんだん間隔を狭く打つようになると餅まき開始の合図。直径 30cm ほどのおかさ、小餅の順にまく。これを 3 回繰り返す。小餅の中には紅色のものもあるが、これは 61 歳がまくことになっている。所要時間は 15 分ほど、参加者は 200 人ほどである。

西袋町の「おこない」は、昔から新年祭と同じ日にやると決まっているという。

（調査日：2014 年 1 月 12 日　調査者：前田・小林）

（6）椿坂町八幡神社

かつては 1 月 5 日に実施していたが、数年前に 1 月の連休頃に変更した。さらに昔は 2 月 8 日であったという。

行事の運営は宮当番（「宮番」）、来年の宮当番（「手伝い」）および厄年がおこなう。もち米は、餅まきをおこなう厄年の人から集める。厄年男性 61 歳が 1 俵、42 歳が半俵と決められているが、合計が 2 俵に満たないときは町内で購入する。餅は前日に女性を含む厄年と「宮番」、「手伝い」で作る。現在では餅搗きは餅屋に依頼し、成形のみをおこなっているが、かつては「宮番」の代表の家や公民館で餅搗きからおこなっていたという。餅は「おかさ」（直径 50cm、厚さ 1cm ほどの円形）、「絵餅」（富士山、ひょうたん、鯛、銭などの形にして色を塗ったもの）、小餅（直径 10cm、厚さ 1cm ほどの円形、特に決まった呼び名はない）の 3 種類を作る。なお、餅は紅と白の 2 種類ある。桟敷等大掛かりなものは使わないため、神社での準備は当日おこなう。

当日、社殿の準備をおこなうのは、主に区長と「宮番」である。社殿の外での餅まきの準備は「手伝い」がおこなう。神事参加者は午後 2 時までに神社に集合する。参加するのは区長・村の役員（「村役」）・厄年男性（25・42・61 歳）・厄年女性（19・33 歳）・「宮番」である。「手伝い」は参加できないため、外で餅撒きの準備をする。なお、かつては 17 歳女性も厄年として神事に参加していたという。神事は、宮司による新年祭および厄除安全祈願祭開始の挨拶→太鼓→新年祭の祝詞→お祓い（奉納物→玉串→参加者→餅）→厄除安全

祈願祭の祝詞→玉串奉納（宮司→区長→村役→厄年→宮番）→太鼓→宮司からの挨拶、という順序でおこなわれる。所要時間は 45 分ほどである。神事終了後、社殿内の片付けをおこなう。御神酒を飲んだり、スルメを焼いて食べたりしながら餅撒きまで待つ人もいれば、一度家に帰る人もいた。なお、餅まき場所には絵餅が吊るしてあるが、今年は雨のためお祓いが終了後すぐに片付けられた。例年はもう少し吊るしておくようである。

3 時 40 分頃から、「手伝い」が 5～10 分おきに拍子木をたたいて、餅まきの開催を知らせる。4 時から餅まきが始まる。まくのは厄年男性 42・61 歳と「宮番」である。なお、紅色の「おかさ」は 61 歳男性が撒くことになっているが、小餅・「絵餅」については特に決まりはなく、箱の中にランダムに入れられている。餅まきは「宮番」の代表が拍子木を鳴らすのを合図に始まる。拝殿前の石垣の上から下の広場へ向かって、はじめに「おかさ」が「せーの」の合図とともにいっせいにまかれ、続いて小餅と「絵餅」がまかれる。各自１箱分をまき終えると小休止を挟んで同じ事を繰り返し、まき終ったところでふたたび拍子木がならされ、解散となる。各回の所要時間は 5 分ほどで、4 時 10 分頃には終了した。参加者は 100 人ほどである。

現在 80 歳を越えるような人たちが現役のころ（20 年以上前）は、餅まきを青年団が仕切っており、青年団が OK を出さないと餅を撒けなかったようである。暗くなってから撒いたような年もあったという。青年団は御神酒を飲んでかなり暴れていたようで、当時は警官も来ていたが、青年団がなくなってからは来なくなったという。「おかさ」は、昔は福を 1 人占めしてはいけないということで取り合ったが、最近では丸ごと持ち帰る人が多くなったという。なお、餅を薄く作るのは、人と分け合うためにちぎれやすくしたものと伝わっている。

（調査日：2015 年 1 月 11 日　調査者：安達　調査協力：小谷委員）

（7）金谷町白山神社

毎年 1 月 17 日に実施している。

餅は前の日曜日に準備する。「村餅」と「厄餅」がある。「村餅」は各家庭から米を 1 升くらいずつ集め、町内全員で搗く。「厄餅」は厄年男性 25 歳が 1 斗、厄年男性 42・61 歳が半俵分を各自で搗く。全体で 1 俵半ほど集まる

準備された餅

という。

当日の神事は午前 10 時からおこなわれる。参加者は、区長・役員・宮総代・厄年男性（25・42・61 歳）・厄年女性（19・33 歳）・当番・氏子である。神事は、太鼓→お祓い（区長・役員→還暦・厄年→氏子→餅）→祝詞→玉串奉納（区長・役員→還暦・厄年→当番・氏子）→太鼓、の順序でおこなわれる。終了後に神職の挨拶がある。所要時間は 50 分弱である。神事の後に神職が厄年・氏子に御神酒をふるまう。厄祓いの渡しもの一式を厄年に渡し、一旦お開きとなる。この間に鏡餅を切り分け、厄年が町内の一軒一軒に配ってまわる。

餅まきは 4 時 30 分から始まるため、4 時 10 分すぎに再び神社に集合して準備する。4

時 30 分、区長の拍子木を合図に餅をまく。まくのは区長・神社役員・当番（6 名）・厄年男性（25・42・61 歳）である。はじめに「村餅」を 2 回に分けてまき、続いて「厄餅」がまかれる。所要時間は 10 分弱、参加者は 60～70

餅まき

名ほどである。

開催日は昔、盗まれた観音様が 1 月 17 日に戻ってきたということで、この日におこなうようになったのだという伝承がある。また、昔から新年祭と同じ日にすると決められているという。餅は厄年男性しかまかないが、厄年女性がお菓子やみかんをまいたこともあったという。

なお、神事と餅まきの時間は委員会で決めているとのことであった。

（調査日：2014 年 1 月 17 日　調査者：深川・小林）

（8）寺中町河和田神社

毎年 2 月 11 日に実施している。餅は通常、前日に準備するが、今回は前日が平日だったため、日曜日に餅つきをおこなった。準備は町内の 5 班が持ち回りで担当班となり、厄年とともにおこなう。米は厄年が出す。

当日の神事は午後 2 時から神社の社殿の外でおこなわれる。参加者は地区と神社の役員・厄年男性（25・42・61 歳）・厄年女性（19・33 歳）・そのほか一般参加者、である。この一般の参拝者は、地域の回覧で事前に祈祷の希望者を募っているのだという。神事は、お祓い→祝詞→玉串奉納（地区と神社の役員）→厄祓いの祝詞→玉串奉納（厄年→一般）、の手順でおこなわれる。この後に護国社での祝詞があるが、こちらは神職と氏子総代のみでおこなう。神事の後はするめと酒がふるまわれ、鏡餅を切り分ける作業がおこなわれる。切り分けた鏡餅は氏子に分けられる。

4 時から餅まきがおこなわれるため、3 時頃に本殿に置かれていた餅を餅まきの場所に移動させる。まくのは厄年男性（25・42・61 歳）だが、今回は 25 歳はいなかった。人数が少ないときは厄年女性（33 歳）の旦那さんがまいたこともあったという。基本的には 61 歳が紅餅を、そのほかが白・緑の餅をまく。拍子木に合わせておかさ餅、小餅の順にまくのを 2 回繰り返す。所要時間は約 10 分、参加者は 100～200 人ほどである。餅まき終了後には左義長がおこなわれる。

寺中町ではこの行事のことを「オコナイ」と呼んでおり、新年で最初の行事である。20 年ほど前までは宮司がいたが今はいないため、新年の行事と一緒にやらざるを得なくなっているとも聞く。「オコナイ」がいつから存在するかわからないが、厄祓いの神事としては江戸時代からあるのではないかという人もいた。餅は裕福さの象徴であり、これをまくことには町内によいことを広める意味があるともいわれる。

かつては餅つきを青年団が仕切っており、氏子総代の家で青年団と厄年が準備をおこなっていた。また、当日は青年団が餅樽を担いで町内を回り、餅まきも青年団長がおこなっていたという。当時の青年団は酒を飲んで暴れていたという話も聞く。

（調査日：2014 年 2 月 11 日　調査者：藤田　山岸委員）

（9）北中町八幡神社

１月の３連休の最終日に実施しているが、かつては旧正月の２月 11 日であったという。

北中町では町内10班のうちの2班が毎年交代で宮当番となる。今回は８班（主）と７班（副）が宮当番であった。宮総代は「オコナイ」のときのみ「カミサマ」と呼ばれる。

１週間ほど前（5 日）に各家庭をまわってもち米を集める。一般の家は１升ずつだが、厄年は１斗出すことになっている。同じ日に神社でテントと足場の組み立てもおこなう。餅は３日前（10 日）の夕方に洗って水につけておき、前日（12 日）の早朝につく。餅搗きは担当班でおこなうが、厄年は餅搗きをおこなわず、絵だけ描く。昔は村の人が米１升か1000 円、厄年の人は米３俵と酒などを出していたのだという。餅搗きが終わってから酒・するめ・餅（餡・きな粉）などがふるまわれる。

餅の準備

当日（13 日）朝、餅を餅桶に詰めて神社まで運んでおく。神事は午後２時からおこなわれる。参加者は、宮総代・区長・厄年男性（25・42・61 歳）・厄年女性（19・33 歳）である。ただし、身内に不幸があった場合は参加しないのだという。神事の前に宮司より玉串奉納の指導があり、宮司二拝・参拝者叩頭・宮司二拍手一拝→開扉→祝詞→玉串奉納（宮総代→区長→厄年男性 42・61 歳・厄年女性 33 歳・厄年男性 25 歳・厄年女性 19 歳）→閉扉、の順序で神事がおこなわれる。神事の後に宮司の挨拶が、神事の前後にはするめと御神酒のふるまいがある。

神前に供えられた餅

餅まきは 4 時からおこなわれる。桟敷は金属製の足場が使われるが、担当班によって組み方などは異なる。また、かつては神社の床下に収納されている丸太を使って組んでいたという。餅をまく人は厄年男性（42・61 歳）である。61 歳は紅餅、42 歳は白い餅をまくことになっている。拍子木の合図ではじめに長方形の伸餅がまかれ、続いて小餅がまかれる。これを２回繰り返す。所要時間10分ほど、参加者 150～200 人ほどである。終了後に桟敷等の片付けをおこなう。

北中町では「オコナイ」は新年の行事には含まないが、左義長も同日におこなっている。この行事がいつからあるのかはわからないが、戦時中からあったのではないかという人もいた。かつては餅を入れた樽（ミミダル・ミミオケなどと呼ぶ）を餅まきの前に青年団が町内を担いでまわったという。このときバスを止めても許されたという。青年団は神の遣いであり、何をしても構わないということであったらしいが、今は見られない。

（調査日：2014 年１月 13 日　調査者：藤田　調査協力：山岸委員）

（10）東清水町稲荷神社

例年１月 11 日に実施している。もともとは２月 11 日であったものが１月 15 日になり、４年前に参加者や親戚の都合により変更した。

今年は厄年がいないため、午後１時から神社の掃除とお供えを、４時からどんど焼きのみをおこなった。これは、数年前に厄年がいなかった年があり、その時、宮当番が神社会計から４・５万円ほど支出して餅を用意していたことが問題となったため、それ以来厄年がいない年は餅まきをしなくなったということによるのだという。

東清水町の「オコナイ」は、宮当番が中心になっておこなわれる。餅は宮当番が餅屋に依頼して作る。もち米は厄年が出すが、まく人１人につきみかん箱２箱程度用意できればいいので、量は厳密には決められているわけではない。近年は１人４万円ほど出してもらい、当番が餅を用意しているという。

餅をまくのは還暦男性（61 歳）と厄年男性で、神事等は特段おこなっていない。

（調査日：2015 年 1 月 11 日　調査者：深川）

（11）尾花町刀那神社

1 月の第 2 日曜日に実施している。10 数年前に参加者や当番の仕事の関係で変更した。もともとは 2 月 11 日前後でおこなっていた。

町内の 4 つの班のうちの 1 班が交代で当番となり、行事を仕切る。殿上まいりの担当とは別の班が担当するようになっている。かつては青年団が行事の主体となっていたが、30 年前に青年団が解散して以降、現在のようなかたちになったのだという。

餅の準備は前日におこなう。米は本厄の人が多く出すという以外に特段決まりはない。また、餅の準備方法も担当班によって異なり、餅屋に依頼する班や、自分たちで餅つきをおこなう班があるなどさまざまである。桟敷は前日に木製のものを組み立てるが、これも当番になっている班が担当する。

当日の神事は、宮司が河和田中を回るので時間は宮司の都合に合わせることになる。今回は午前 11 時すぎからおこなわれた。神事は、祓詞→お祓い（供物・参加者・拝殿外）→供物を本殿へ移動→祝詞→玉串奉納→供物を本殿から下げる、という順序でおこなわれ、終了後に宮司からの挨拶と当番からお守りの配布がある。なお、供物の移動の際には厄年男性 42 歳の代表 3 名が手伝う。所要時間は約 1 時間である。神事終了後、当番が参加者に酒とするめをふるまう。参加者には紅白の餅が配られる。

神事

餅まきは 4 時からおこなわれる。桟敷は大掛かりなものではないので、撒く人数は 3 人と決められている。餅をまくことができるのは担当班の本厄の男性（42 歳）と、前厄・後厄（41・43 歳）の 3 人である。なお、同じく尾花町でおこなわれる殿上まいりではその年の厄年全員がまくことができる。餅まきは当番の代表による拍子木を合図に始まる。おかさ、小餅の順にまいた後、小休止をはさんで同じことを繰り返す。2 回目には小餅と一緒に絵餅もまく。所要時間は 5 分ほど、参加者は 100 人ほどである。

（調査日：2015 年 1 月 11 日　調査者：深川）

（12）沢町白山神社

1 月の 3 連休の土日に実施している。建国記念日制定の翌年から 20 年ほど前までは 1 月 9 日に、それ以前は旧正月に実施していた。

上沢の「おこない」は宮総代が中心となって実施される。宮総代は宮当番とも呼び、神主を兼ねている。上沢では、町内 2 班が隔年で神事の担当となり、氏子・壮年会も手伝う。

餅は前日に準備する。かつては女性は手伝ってはいけないとされていたが、現在は女性の手を借りている。餅には四角形のおかさ餅と小餅がある。小餅には還暦や米寿などの人がいる場合は紅色の餅も作る。また、厄年の人の年齢や達磨の絵などを描いた餅もいくつか作る。年によっては絵の描いてある「懸賞餅」を作り、これを取った人は桟敷に吊るされている絵が描かれた大きな餅をもらうことができるという。米は厄払いを受ける人が出す。厄年男性が通常 1 人半俵程度だが、厳密な決まりはない。厄年女性はお重（現在はオードブル）を出す場合や、もち米が少ない場合にもち米を出すこともあるが、これも厳密な決まりはない。今回は米寿の人ももち米を出したという。同じ日に桟敷の組み立てを担当班と壮年会がおこなう。桟敷には昔から飾りとして杉の葉をぶら下げているが、由来はよくわからないという。

当日は午後 2 時を目処に、宮総代と氏子が神社に集合し、社殿に向かって二拝一拍手一拝の作法でお参りをする。その後、厄年が奉納した御神酒・するめ・お重（オードブル）を食べる。この会食の際には神社の修理などについて相談をしていた。なお、厄年が奉納する御神酒は通常、男性が 2 升、女性が 1 升ほどだが、これも厳密な決まりはない。

3 時 30 分頃から餅まきの準備をはじめ、3 時 50 分頃、太鼓を合図に壮年会が厄年の胴上げをおこなう。4 時から餅まきがおこなわれる。まくのは厄年・還暦・米寿などである。区長が上沢の人の場合は区長も参加するが、今年は下沢の人であったため参加しなかった。また、今回は人が少なかったため、神主も参加した。

はじめに拍子木と太鼓を合図に、拝殿の前で壮年会が肩を組み、「ワッショイ」の掛け声とともにまわる。続いて桟敷の下へ走り、神主・厄年に対して早く餅をまくように要求する。これを 3 回繰り返したところで餅がまかれる。おかさ餅、小餅の順にまかれ、拍子木を合図に中休みとなる。再び拍子木と太鼓を合図に、先ほどの動作が繰り返され、再び餅をまく。所要時間は 15 分ほどである。

当日参加していた 70 代女性の話によると、自分の祖父の代でもやっていただろうということであった。また、戦時中は中止していた時期もあるという。

（調査日：2015 年 1 月 11 日　調査者：藤田）

（13）沢町刀那神社

毎年 2 月 11 日に実施している。

餅の準備は前日に「宿」でおこなう。下沢において「宿」は、その年の神社の祭礼や修理などを毎年 1 軒ずつ持ち回りで担当する役割のことで、およそ 30 年で一巡する。費用は各戸から一律 1000 円を徴収し、餅代にあてる。厄年の人がいる場合は、その人が別途餅を用意する。

当日は午後 3 時頃から拝殿で酒を飲む時間がある。現在は簡単な食事（つまみ）を用意する程度だが、30 年ほど前まではお膳で出していたという。なお、神事などはおこなわないが、昔からおこなっていないのだという。

4 時から餅まきがおこなわれる。まくのは区長・神社役員・厄年男性（42・61 歳）であ

る。ただし、最近は人口が少なくなってきたため、厄年男性 25 歳や女性の厄年（19・33 歳）の代理人（男性）もまくようになってきているのだという。はじめに神社役員が拍子木を打ち鳴らす。拝殿の中で神社役員や厄年の男性が「ワッショイ、ワッショイ」の掛け声をかけながら円陣を組んでおり、扉が開くと下の広場へ降りてくる。円陣を組んだまま、まわりながら広場を動き回り、その後厄年を雪の上に投げ落とすというが、今年は厄年がいなかったため、厄年の投げ落としはおこなわなかった。続いて桟敷の上から餅がまかれる。直径 30cm ほどのおかさ餅を 1 人 1 個ずつ、無数の小餅をまくのを 2 回繰り返す。なお、桟敷の全面には杉の葉が下向きに並べられていた。参加者は 50 人ほどである。当日はどんど焼きもおこなっている。

30 年ほど前までは、餅まき終了後に青年団が厄年の家を訪れ食事をしたという。これは無礼講で、1 軒あたり数 10 万円もの出費だったという。

（調査日：2014 年 2 月 11 日　調査者：前田・小林）

（14）上河内町白山姫神社

1 月の第 2 日曜日に実施している。かつては 1 月 8 日だったが、参加者の仕事の関係もあり 15・16 年前に変更された。

米洗い・餅搗きは前日に公民館でおこなう。準備は町内を南北 2 つの班に分け、1 年交代で「おこない」の当番班としておこなっている。参加者は 20 人ほどである。かつては厄年の男性がおこなっていたが、人が少なくなってきたため、区がおこなうようになり、現在では女性も参加するようになった。もち米はかつては厄年が出していたが、これも人が少なくなってきたため、町から 1 俵出し、残りは厄年が出すようになった。今年は全部で 2 俵分の餅を搗いたという。同じ日に木製の桟敷の組み立てもおこなう。

当日は 9 時から神事がおこなわれる。参加者は還暦の男性と厄年の男女ほかである。神事は、祓詞→一拝→お供えを祭壇へ移動させる→大祓詞→玉串奉納→お供えを戻す→一拝、の順序でおこなわれる。終了後に宮司からの挨拶とお守りの配布がある。

午後 1 時に公民館に集合し、餅を箱や桶に詰めて社殿へ持って上がる。数人は境内に残って火を起こして、そのまま火の番をし、それ以外の人は 3 時まで休憩となる。3 時に壮年会（消防団）10 人ほどが拝殿の中で肩を組み、「ワッショイ、ワッショイ」の掛け声と共に回りながら拝殿の外へ出てくる。続いて、厄年の男性 1 人を輪の中に呼びいれ、胴上げを 3 回し、最後に雪の上に放り投げる。これを厄年の人の数だけ繰り返す。4 時に当番班長が拍子木を鳴らすと、壮年会が再び拝殿の中で肩を組み、「ワッショイ、ワッショイ」の掛け声と共に回りながら拝殿の外へ出てくる。一団が桟敷の真下に来ると、餅まきが始まる。おかさ、小餅の順にまくのを 2 回繰り返す。まくのは本来は厄年男性だが、今回は不参加だったため、還暦男性と当番班長がまいた。参加者は 100 人ほどである。

（調査日：2015 年 1 月 11 日　調査者：前田）

（15）落井町日吉神社

かつては 1 月 5 日だったが、現在は 1 月 3 日に実施している。これは、15 年前から仕事始めの関係で参加しやすいように変更した。

準備は厄年男性 42 歳が係となって、厄年男性（25・42・61 歳）を中心におこなわれる。12 月末（12 月 30 日）に桟敷の組み立てと景品の買出しをおこない、前日（1 月 2 日）に餅搗きをおこなう。餅は事前に餅屋に依頼し

て搗いてもらい、成形を厄年男性 25・42 歳が、絵付けを厄年男性 61 歳（＝還暦）がおこなう。午後から餅・景品などの運搬、桟敷の仕上げなどの準備をし、夜は打ち上げがある。

当日は午後 1 時から公民館で「粗賄」がある。かつては宮総代代表宅でおこなわれていたが、6～7 年前から公民館 2 階の大広間でおこなわれるようになった。参加者は還暦・厄年男性（25・42 歳）・厄年女性（19・33 歳）・区長・農家組合長・宮総代 3 人である。宮総代のうち 1 名が代表となって仕切り、酒などの接待は宮総代がおこなう。お膳は 5 品で提供することになっているが、内容についてはおせち料理を基本とするという以外に特に決まりはなく、毎年変わるという。お膳は前日から宮総代の奥さんが準備して提供する。今回は紅白の蒲鉾・数の子・黒豆の煮物（栗入り）・きんぴらごぼう・お吸い物であった。1 時 40 分に公民館を出発し神社をめざす。宮司を先頭に宮総代、他の参加者と続き、到着後、２時から拝殿正面の階段で記念撮影をおこなう。なお、今年は大雪のため「粗賄」の終了時間を 10 分繰り上げたのだという。

2 時 20 分から神社で神事がおこなわれる。神社内の準備は宮総代がおこなうとのことである。神事の参加者は区長・農家組合長・宮総代・還暦男女・厄年男性（25・42 歳）・厄年女性（19・33 歳）である。神事は、太鼓→祓詞→大祓詞→役祓い→玉串奉納→太鼓、の順序でおこなわれる。

餅まきは3時50分から厄年代表による挨拶、注意事項や景品交換についての説明があり、４時から宮総代の拍子木を合図にまかれる。餅をまくのは厄年男性（25・42 歳）・還暦男・宮総代代表・区長・農家組合長・宮司である。餅は石垣の上から 2 回に分けてまかれるが、１回目はおかさ、小餅の順に、2 回目は絵餅、小餅の順にまかれる。所要時間は 10 分ほどで、参加者は 150 人ほどである。餅まき終了後に景品交換と後片付けがおこなわれる。

なお、宮総代の作成した資料ではこの行事の名称は「元旦祭、厄払い神事、餅まき」となっていた。

（調査日：2015 年 1 月 3 日　調査者：深川　調査協力：小谷委員）

（16）松成町八幡神社

1 月最初の日曜日に実施される。

餅の準備は厄年とその家族 1 名がおこなう。数年前までは餅搗きからおこなっていたが、現在では前日に餅屋から購入しているという。また、桟敷の準備も前日におこなう。

当日は午後 2 時から神社で神事がおこなわれる。参加者は還暦および厄年男性（25・42 歳）・厄年女性（19・33 歳）・区長・副区長・公民館長・農家組合長、宮総代・副宮総代である。なお、社殿内のお供えは春・夏・秋の神事においても同じだが、鏡餅は正月にだけ飾るのだという。神事は、太鼓→本殿での祝詞①→参加者のお祓い→一拝→宮司・宮総代・副宮総代によりお供えを祭壇へ奉納→本殿での祝詞②→祭壇前にて祝詞③・④→区長・公民館長・農家組合長・副区長・還暦および厄年・副宮総代・宮総代の順に玉串奉納（区長の玉串奉納の際には参加者全員で二拝二拍手一拝し、他の参加者は各々奉納時に二拝二拍手一拝する）→宮司・宮総代・副宮総代がお供えを祭壇から下げる→太鼓→一拝、の順序でおこなわれ、終了後に宮司より祝詞の説明がある。①は祓詞、②は南越支部で唱えられる大祓、③は歳旦祭の祝詞、④は還暦祝いおよび厄祓いの祝詞であるという。神事の所要時間は 1 時間ほどで、終了後に御神酒とするめの振る舞いがある。

餅まきは午後 4 時からおこなわれる。まくのは還暦および厄年の男性・宮総代・副宮総代・宮司で、餅まきの前に宮司が神社の境内に建てた桟敷の下と上でお祓いをおこなう。餅は紅白の小餅・丸型の伸餅、絵餅があり、3 回に分けてまかれる。所要時間は 10 分ほどで、餅まき終了後に桟敷等の片付けをおこなう。

（調査日：2014 年 1 月 5 日　調査者：前田・藤田）

（17）川島町加多志波神社

毎年 2 月 11 日に実施している。

行事を取り仕切るのは宮総代を中心とした神社役員だが、実際の行事の主体となるのは 25 歳男性とその父親である。25 歳男性は「ほうらいし」と呼ばれ、村の古老から指導を受け準備をおこなう。

餅の準備は前日の朝、「ほうらいし」とその父親が公民館に集合しておこなう。餅は餅搗き機を使って搗くが、杵と臼を使って搗いているところの写真だけ撮る。餅はおかさ餅を 4 個と小餅のほかに「笹もち」を作る。「笹もち」は、5m ほどの竹に樫の枝葉 7 本を付け、餅を 7 個巻きつけたものである。これを 8 個作るが、1 個は予備だという。もち米は「ほうらいし」が 1 人 20kg ずつ出す。かつては「ほうらいし」の中で宿を決め、その家で準備をおこなっていたという。また、もち米は 1 人 5 升であったという。桟敷は 1 週間ほど前（2 日）に組み立てる。

笹もち

当日、午前 9 時 30 分に「ほうらいし」が公民館に集合し、「笹もち」を神社まで担いで運ぶ。9 時 50 分頃神社に到着し、10 時から「笹もち」を桟敷の中央に飾る。10 時 10 分頃、越前市高木町の区長と宮総代が御神酒をもって来訪。餅まきのリハーサルの後に一旦解散する。午後 1 時 30 分、再び公民館に厄年と宿の親が正装（スーツ）して集合し、神社へ徒歩で移動する。2 時前に神社に到着すると、鳥居の前で「ほうらいし」が並んで塩をまく。

2 時から拝殿で新年祭並びに厄払い祭の神事がおこなわれる。参加者は区長・副区長・宮総代・副宮総代・農家組合会長・農家組合副会長・「ほうらいし」・還暦男性・厄年男性 42 歳・厄年女性ほかである。ここでは宮総代が神事の進行をおこなう。神事は、太鼓→拝殿前でのお祓い→祝詞→玉串奉納、の順序でおこなわれる。終了後に区の役員と宮総代により酒がふるまわれ、厄年にはお守りが配られる。所要時間は 1 時間強である。3 時 10 分から拝殿前の広場で簡単な左義長をおこなう。

餅まき

3 時 55 分から餅まきがおこなわれる。はじめに「笹もち」1 個が落とされ、宮総代の拍子木を合図に塩、「笹もち」の順にまく。その後、区長と宮総代が観音堂前の桟敷から「笹もち」と小餅をまく。所要時間は 20 分ほど、

参加者は200人ほどである。

「笹もち」はかつては「まゆ玉」と呼んでいたという。養蚕と関係があるとも、雨乞い神事に使ったものともいわれる。「おこない」が現在のような形になったのは戦後からで、ずいぶんと簡素化されたという。現在の氏子が 25 歳の時には串にさした餅を立てていたという。また、モーニングを着るようになったのもその頃からだという。

（調査日：2014年2月11日　調査者：深川・竹内）

（18）戸口町白山神社

毎年1月9日に実施している。

餅は厄年が米を1人半俵ずつもちよって前日に作る。桟敷は専用のものがあり、前日に組み立てる。例年は厄年男性42歳がすべて仕切るが、今年はいなかったため、61歳がおこなった。

当日は午後2時から神事がおこなわれる。参加者は還暦男女、厄年男 25・42 歳、厄年女 19・33 歳、区長、役員、宮総代である。神事は、祓詞→大祓詞→歳旦祭の祝詞→厄祓いの祝詞→玉串奉納、の順序でおこなわれる。終了後に還暦と厄年男女の写真撮影があり、餅まきまで酒とするめの振る舞いがある。

3時45分から桟敷の上で餅をもって写真撮影をし、厄年代表による挨拶、お祓いの後に子ども向けの菓子まきがおこなわれる。4 時から区長の拍子木を合図に3回に分けて餅がまかれる。まくのは区長・神主・厄年男である。1回目と3回目はおかさ、小餅の順に、2回目の最初には桟敷にかけられている絵餅がまかれる。餅は白いものだけでなく、食紅で着色されたものもある。文字の書いてある餅は終了後に景品と引き換える。当日は桟敷以外の片付けをおこない、桟敷の撤去は次の日曜日におこなう。

（調査日：2014年1月9日　調査者：深川・小林）

（19）中戸口町白山神社

1月6日に実施している。

餅は1ヶ月半前から段取りをして、前日に作る。桟敷は前日もしくは前々日に組み立てる。桟敷の組み立ては町内の5班が毎年交代でおこなう。

当日は午後2時から神にて神事がおこなわれるが、神事に先立ち宮司から神事についての説明がある。参加者は宮総代・厄年男性（25・42・61歳）・厄年女性（19・33歳）・区長である。神事は、開扉→祓詞→お供えをご神体の前に移動させる→大祓の祝詞→歳旦祭の祝詞→厄祓いの祝詞→玉串奉納（宮総代筆頭→厄年（男 42 歳・女 33 歳・女 19 歳）→区長→他の宮総代）→お供えを元に戻す→閉扉、の手順でおこなわれる。所要時間は40分強である。神事の際足はくずしても良いが、足の裏を神様に向けないようにという注意があった。

神事終了後、区長から参加者へ御神酒とするめの振る舞いがある。お供えの鏡餅は切って厄年に分ける。これを「かがみ割り」や「餅切り」と呼んでいるようである。昆布・するめについても厄年に振る舞い、もって帰ってもらう。

餅まきは3時半から行われる。まくのは厄年男性・宮総代・区長・神主である。餅まきの前に、お祓い→おかさの披露→宮総代のあいさつ→厄年紹介→景品交換の説明があり、続いて餅を2回に分けてまく。絵餅→おかさ→小餅の順にまくが、小餅には文字が書いてあるものもあり、終了後に景品と交換する。

（調査日：2014年1月6日　調査者：深川・小林）

（20）上戸口町刀那神社

毎年1月8日に実施している。

餅は餅屋に依頼して前日に厄年が準備する。

米は厄年男性 42・61 歳が 1 俵、25 歳が半俵を出すことになっている。今回は 2 俵（120kg）を使用した。桟敷は前日に準備する。金銭的に余裕があれば業者に頼むが、なければ自分たちで組み立てる。

当日は午後 2 時から神社にて神事がおこなわれる。参加者は宮総代・区長・厄年男性（25・42・61 歳）・厄年女性（19・33 歳）および厄年の親類などである。神事の流れは中戸口と同じである（神主が同じため）。玉串奉納の順番は、宮総代→区長→厄年男性 25・61 歳→厄年女性 19・33 歳→厄年の親類ほか、である。神事終了後に御神酒とするめの振る舞いがある。

餅まきは厄年男性（25・42・61 歳）と宮司がおこなう。4 時から写真撮影、お祓い、挨拶があり、続いて餅がまかれる。最初はおかさ、小餅の順に、続いて絵餅、小餅の順にまかれる。所要時間は 10 分弱で、終了後に景品交換と片付けがおこなわれる。桟敷も当日のうちに片付ける。

餅まき

上戸口町では「おこない」は、年賀とは別の行事として認識されているようである。

（調査日：2014 年 1 月 8 日　調査者：深川・小林）

（21）磯部町石部神社

1 月の連休中に実施している。

磯部町では厄年の出すもち米・御神酒・奉納金が決められている。厄年男性 61 歳（還暦）と 42 歳が奉納金 20,000 円、御神酒 1 升、もち米 1 俵、25 歳が奉納金 10,000 円、御神酒 1 升、もち米 1 斗、厄年女性 33 歳が奉納金 3,000 円、御神酒 1 升、新生児と転入者が奉納金 1,000 円である。ほかに区長と宮総代ももち米 1 斗 5 升ずつ出している。餅はほとんど餅屋に依頼している。磯部町では町内でまく餅と厄年が個人でまく餅は別に用意しているようである。

当日は午後 2 時から神社で神事がおこなわれる。神事の参加者は厄年男性（25・42・61 歳）・厄年女性（19・33 歳）・新生児・転入者（新区民）・地区と宮の役員である。神事は祝詞→玉串奉納の順序でおこなわれ、終了後に神主の挨拶とお守りの配布がある。

神事

4 時前から宮総代の挨拶、お祓いがあり、4 時に拍子木の合図で餅まきが始まる。まくのは厄年男性（25・42・61 歳）で、境内に建てた金属製の足場の上からまく。2 回に分けてまかれるが、それぞれおかさ、小餅の順にまかれる。2 回目には小餅とともに絵餅もまかれる。所要時間は 10 分弱、参加者は 200 人ほどである。終了後に桟敷以外のものの片付けをおこなう。

（調査日：2014 年 1 月 12 日　調査者：小谷委員・深川）

３．各集落における事例②（聞き取り調査報告）

（１）舟枝町白山神社

地元の古老（70 代後半男性）に聞き取りをおこなった。

かつては 1 月 12 日に実施していた。

舟枝町では毎年 4 軒ずつが当番となり「オコナイ」ほか祭をとり仕切る。米は当番が各家庭から 1 升ずつ、もち米がない家からは 1,000～1,500 円程度を集める。今年は全部で 4 俵 5 升集まったという。餅は前々日にもち米を洗って水につけ、前日に公民館で餅つき機を使って搗く。餅にはおかさと小餅がある。

当日は午後 1 時半から神社で厄払いの神事をおこなう。御神酒や果物ほかが供えられるが、これは厄年が奉納するのだという。所要時間は 1 時間ほどで、還暦男・厄年男性（25・42 歳）・厄年女性（19・33 歳）が参加する。終了後にお守りが配布される。

3 時から餅まきがおこなわれる。境内に建てた金属製の足場の上からまくが、かつては当番が田んぼのハサバを使ってつくっていたという。餅をまくのは当番の家の主人で、厄年はまくことができない。餅は餅まき用の桶に入れらており、はじめにお祓いをしてからまく。桶に入りきらない分はみかん箱に入れられており、桶が空になってからまく。所要時間は 10 分ほどで、今年の参加者は 300 人ほどいたという。

舟枝町ではこの行事のことを「オコナイ」と呼ぶが、かつては「団子まき」といったようである。近年では餅まきが危険ということで、「もち配り」ともいうのだという。かつては左義長もしていたというが、負担が大きく、左義長はやらなくなったという。現在では神事と餅まきの合間に、正月飾りを燃やす簡単なものをやっている。

（調査日：2015 年 1 月 23 日　調査者：深川）

（２）片上地区

南井町在住の 65 歳男性によると、四方谷町では男性の同級生（女性）が 19 歳のときに餅をまいた記憶があるということで、1969 年頃まではおこなわれていたようである。現在河和田・北中山地区でおこなわれているような、厄年の人がお金や米を出し、神事の後に餅をまくという行事であったようである。なお、女性は餅まきができないため、そのときは代わりに家族の男性がまいたのだという。

なお、大野町でもやっていたという記憶があるが、四方谷町より早くにやめてしまったのだという。おそらく 50 年ほど前のことではなかったかということであった。なお、南井町では餅まきをしたという記憶はなく、少なくともここ 60 年ほどの間ではやっていないのではないかということであった。片上地区のほかの町ではやっていたという話を聞いたことはないということであった。

乙坂今北町在住の 70 歳男性によると、子どもの頃に乙坂今北町で餅まきがおこなわれていたという記憶があるという。おかさ・小餅があり、厄年の人が餅をまくなど、現在河和田・北中山地区でおこなわれているものと同じようなものであったという。昔は片上地区のどの町内でも餅まきや左義長（サギッチョ）はやっていたのではないかということであった。左義長は今では別所町のみでおこなわれているが、これは片上地区の左義長として残してもらっているのだという。

（調査日：2015 年 1 月 31 日　調査者：安達）

（３）越前市服間地区

寺地町在住の 60 代後半の男性と横住町在住の 70 代前半の男性によると、越前市の服間地区では現在、朽飯町・藤木町・寺地町・横

住町・室谷町で餅まきをしているという。この行事の名称は「オコナイ」と呼んでいるとのことである。相木町では左義長はおこなうが、餅まきはしていない。なお、春山町で餅まきをしていないということは、春山町在住の別の方への聞き取りでも確認している。

寺地町では現在、1 月第 2 日曜日に実施しているが、かつては1月15日であったという。事前に各家庭から米を集め、公民館で餅搗き機を使って餅を搗く。集める米の量については特に決まりなどはないとのことで、今年はもち米 80kg を使用したとのことであった。餅には「おかさ」、小餅、絵を描いた餅がある。餅まきは刀那神社の社殿の西側の広場でおこなう。まくのは餅まきの当番 3 人である。かつては厄年がまいていたようだが、少なくとも話を聞いた寺地町の方は、25 歳の厄年のときにまいた記憶はないとのことであった。

横住町では現在、1 月第 4 日曜日に実施しているが、かつては1月15日であったという。餅は 4～5 年前から餅屋に依頼して作るようになったという。ここでも餅には「おかさ」、小餅、絵を描いた餅がある。もち米は各家庭から集めるが、厄年は多めに出すことが多いという。話を聞いた横住町の方の息子さんが 42 歳のときには 1 俵出したという。また、厄年は神社に 3～5 万円ほど寄附することが多いという。餅をまくのは厄年の男性（25・42・61 歳）と餅まきの当番 5 人である。

いずれの集落でも、昔は餅の準備に女性は関わっていなかったが、最近では女性も手伝っているという。また、宮司を呼んで神事もおこなっているようである。

なお、聞き取りでは確認していないが、横住町の白山神社では餅まき時の餅と思われるものがいくつか残されており、白の小餅だけでなく、紅色の小餅も作っているようである。

（調査日：2015 年 1 月 21 日　調査者：深川・安達）

（4）福井市東大味町

現区長と町内の古老（88 歳男性）に聞き取りをおこなった。

東大味町では厄年男性 42 歳が頭（「宿」と呼ばれる）となり厄年が主催する。区や宮総代は御神酒を持参する程度の手伝いである。行事の日程・進行などに特段決まりごとはない。そのため、昔から厄年の都合に合わせて日を決めている。左義長も同じ日に実施しているが、最近は人が減ってきたため、餅まきは開催しない年もあるという。

厄年が出す米やお金などは厳密には決められていない。餅をまく人数に合わせて寄付金や米の量を調節しているが、42 歳が筆頭になるとのことである。現区長が 42 歳のときには米や寄付金で 5 万円ほどかかったという。このときは米を 2～3 俵集め、餅は 6000 個ほど作った。

当日は昼過ぎに神事をおこない、午後 3 時頃に餅まきが始まる。昔は桟敷を用意していたが、最近では用意しない年もあるという。まくのは厄年男性 25・42 歳・厄年女性 19・33 歳で、還暦がまくときもある。

この行事は「餅まき」と呼ばれるが、「オコナイ」と呼ぶこともある。周辺の町内でおこなわれているということは聞いたことがないという。また、由来等についてはよくわからないというが、話を聞いた古老の父親が 42 歳のときに餅まきをしているのをみているとのことで、終戦直後の頃にはおこなわれていたようである。

（調査日：2015 年 1 月 30 日　調査者：深川）

4. 区有文書等にみられる過去の「おこない」

記録（文書調査報告）

（1）河和田町

小坂区有文書『決議録』には、新年の初総会をはじめとした各種会議の議事録があり、その中に「おこない」に関係すると思われる記録がある。昭和元年 12 月 30 日の協議委会では、「祈年祭ニ関スル件」として、「初総会ノ決議通リ二月六日ニ執行」「目下大喪中に就キ謹□ノ意ヲ表スル為例年ノ神餅授リ事ハ中止シテ区内一般ニ配布」、昭和 7 年 2 月 10 日の委員会では、「区ノ餅撒ハ時局重大ナル折柄ニ付本年度ハ中止」とある。河和田町では、昭和元年頃にはすでに毎年の恒例行事として餅まきがおこなわれていたと考えられる。

『福井県神社誌』では、『今立郡神社誌』に記載のある正月 25 日の神事を河和田町の「おこない」の基になったものとしているが、この神事に関連するとみられる記録は、複数確認できる。杉本家文書『河和田風景往来』（万延２年筆写）には「正月廿五日鏡開乃御神事」山岸善四郎家文書『式内式山神社天神宮に付口上之覚』（慶応 4 年）には「祭礼毎年正月廿五日」とある。また、鯖江藩の『寺社改牒』（享保 6 年）にも「神事正月廿五日」とあり、内容の異同については不明ながら、正月 25 日の神事が江戸時代中期からあったことがわかる。

（2）莇生田町

莇生田町の「おこない」に関する記録には、莇生田区有文書『決議録綴』・『決議録』（2 冊）・『莱祀諸事控』がある。これらの史料中では、現在の莇生田町の「おこない」は、「莱師」もしくは「莱祀」（大正５年頃までは「莱師」の表記が多い）と表記されている。なお、『莱祀諸事控』については齋藤（1941）に例規部分の翻刻があり、行事の内容についても報告があるため、ここでは詳しい説明は省略する。

『決議録綴』・『決議録』には、明治 34 年から昭和 12 年までほぼ毎年、新年の初総会決議事項に莱師（莱祀）宿の記載がある。大正 6 年からは厄年の人の名前も記載される。当初は男性 25・42 歳のみだが、昭和 15 年には 61 歳も厄年として記載される。ただし、『莱祀諸事控』の記載や齋藤（1941）の報告も併せてみると、餅をまいていたのは 6～10 歳の子どもであり、厄年は寄進をおこなっていたと考えられる。戦時中は昭和 13 年から餅まきを中止し、厄年による酒の寄進がおこなわれている。おそらくそれらをもちいた振る舞いがおこなわれていたと考えられる。終戦前後からは厄年の記載がみられなくなるが、するめと酒を区で購入していることから、酒の振る舞いが引き続きおこなわれていたと思われる。昭和 27 年に厄年の披露に関する記述があり、翌 28 年には女性を含む厄年の名前が記載される。この頃に餅まきが復活した可能性があるが、餅をまいたのが従来どおり子どもだったのか、あるいは厄年がまく行事へとこの時期変化したのかは不明である。

「莱祀」あるいは餅まき中止の記録は、第二次大戦中以外にも数回確認できる。大正 2 年と昭和 2 年が大喪中のため中止、昭和 7 年が日支事変のため中止などとある。明治 29 年には「賄及莱師米代ニ廃止ニ加へ苧紵等ノ代合シテ軍資ニ献納スルコト」とあり、これが莇生田町の「莱祀」に関する最古の記録である。それ以前から「莱祀」がおこなわれていたことがわかるが、明治 29 年から数年間は中止していたようである。

（3）片山町

片山町では過去の「おこない」ほか神事等の記録を『神田帳』と呼び、江戸時代以来の

ものが残されている。今回の調査では主に戦前の状況を把握するため、江戸時代前期から昭和33年までの記録が書かれた3冊を対象に調査をおこなった。ここでは古いほうから仮に1号・2号・3号文書とする。

a. 1号文書

前欠。年号が確認できる最古のものは慶安2年の記録だが、それ以前から書かれていた可能性がある。延宝4年から享保7年と享保15年から寛保4年の記録が欠けているが、他はほぼ毎年記録がある。

内容としては、毎年正月15日前後の日付で「神田頭入用日記」「神田米割日記」「神田卸米並氏子米取立割賦覚」などとあり、米の供出量、供出者とともに、おそらく供出された米を用いておこなわれた「食喰」(おそらく神人共食の神事、いわゆる「直会」)の参加人数の記録がある。なお、享保年間に正月14日の日付で「神田米割日記」とあるのは、鯖江藩の『寺社改牒』にある「此米正月十四日ニ氏子割賦仕候」という記述と関連するものと思われる。ほかに、2月に「官途烏帽子覚帳」と「月代人数米覚」という、おそらく成人儀礼に関する記述がある年もある。

この文書において注目される記録に、明和6年に祭礼の執行などの取り決めをおこなっているものがある。この年にはおそらく正月9日に餅まきがおこなわれ、それは神田米を使っておこなわれる祭礼であったということがわかる。なお、明和7年には、官途烏帽子、月代人などに関する取り決めがおこなわれている。以降、餅まきに関する記述が散見される。文政5年に「閏正月十五日餅蒔ニ付村寄進覚」、天保8年正月15日に「天保八年酉年、極悪作ニ付…(中略)…神前之餅蒔不申、右米氏子中へ割賦仕候」などとあり、少なくとも文政期頃には、毎年正月15日前後の祭礼として餅まきが定着していたと考えられ、明和6年から継続しておこなわれていた可能性もある。

b. 2号文書

「嘉永二酉改」とあり、嘉永2年から大正14年年までの記録がある。1号文書と記載内容はほとんど同じである。安政6年、明治3・15・17・21年の正月14日もしくは15日に「餅まき」や「餅蒔」の記述があり、餅をまいた人の名前が書かれている年もある。明治24年以降は毎年、正月14日もしくは15日に餅をまいた人の名前が確認できる。餅まき人は3人のことが多いが、4人もしくは5人のときもある。明治18年からはそれまでまとめて記載されていた神田米と氏子米が分けて書かれるようになり、明治20年以降、寄進米という記述もみられるようになる。氏子米については齋藤(1941)に「氏子米と称して男の子の生れた家は米二升五合、女の子の生れた家は一升五号を出す」とあるが、明和6年の取り決めとは内容がかなり異なっている。米

の供出の仕方がどこかの段階で変化しているようであり、この時期に何らかの取り決めがなされた可能性も考えられる。官途烏帽子、月代人についての記録も明治 24 年を最後にみられなくなるようである。

明治 25 年以降はそれまで神田米・氏子米を使っておこなわれていた行事の記録のみとなる。明治 41 年からは神田米の記述がみられなくなるが、これはこの頃おこなわれた神社の整理に関連して、神田が売却された（齋藤 1941）ことによるものと思われる。明治末頃からはこれらの記録の中に厄年に関係する記述がみられるようになる。明治 42 年には 42 歳の「餅蒔寄進米」の記録があり、明治 44 年の特別寄進米の項の寄進者の注釈に「娘ソデ十九才」などとある。大正 10 年の記録からはほぼ毎年、厄年（17・25・33・42 歳）の寄進についての記録があらわれるようになり、それまでの餅まき人の記載に 42 歳厄年の餅まき人の項が加えられるようになる。

c. 3 号文書

「昭和元年改」とあり、大正 15 年から昭和 33 年までの記録がある。2 号文書の後半にあるものと記載内容はほとんど同じで、厄年の寄進や餅まきに関する記録がみられる。厄年の寄進は、現在多くの集落で厄年と認識されている男性 25・42・61 歳、女性 19・33 歳のほかに、女性の 17・61 歳からのものも確認できる。厄年の餅まき人はほとんどが 42 歳のようだが、昭和 10 年には 61 歳の餅撒人の記録がある。昭和 13 年は「当年ハ事変真最中ニ付餅撒きは中止し全区壱百拾八戸に壱重宛神前ニ於て手渡しを為したり」とある。以降は氏子米、寄進米などの記載はあるものの、餅まき人の記載がなくなる。戦時中は餅まきではなく、餅を手渡すという行事に変わっていた可能性があるが、いつから餅まきが復活したのかは不明である。昭和 27 年の記録には「年頭行事に女性が参加」という見出しで「当区が上出、中出、下出の三番に別れて毎年行ふ年頭神事行事には古来より宿をはじめ一般の当番家庭からも女性の参加は許されず男性のみの神事であったが、昭和廿六年一月三日の区総会に於て女家庭からの参加を認める事となり下出番の宿林五郎右衛門宅の行事から前例を破って行ったが何等の障害も支障もなく終わった」とある。

（4）椿坂町

椿坂区有文書『当組趣法貯金規約書』に所収の明治 42 年の初集会決議事項に、「(正月) 十七日氏神年頭参の件」「供餅手渡ハ」、明治 43 年の初会決議に「旧正月拾七日餅巻キノ件当分ハ餅散布ノ儀ハ廃止スルコト」とある。いずれも旧正月 17 日におこなわれる餅まき（餅手渡し）についての記録で、日付は過去の調査（杉本 1976）での聞き取りと異なるが、現在の「おこない」に繋がる行事が明治末期には存在したと考えられる。なお、明治 43 年に廃止とあるのは、明治 42 年 2 月 6 日に西袋の熊野神社へ合祀されたことと関連するものと思われる。大正 6 年の決議には「餅巻ニ関スル件　餅巻当日（二月八日）午後四時手渡ノコト」とあり、数年後には復活していたようである。この際に日程が変更されている。現地調査時の証言や杉本（1976）の記述などと併せて考えると、戦前までは 2 月 8 日開催であったと考えられる。また、「餅米ハ区ヨリ割米壱斗五升宛」「餅米ハ役年ニ相当スル人ハ随意に出費」「酒ニテ寄附シタキ人ハ区貯蓄金ニ随意出費」ともあり、当時は区で出す米が中心となり、厄年は任意で米や酒代を出していたということがわかる。

（5）磯部町

『区費人足帳』『区費並人足帳』などの名称で、明治 31 年から大正 3 年までの一部と、昭和 10・19 年、昭和 21 年から 30 年までの区費の徴収に関する記録がある。明治期の記録では「おこない」に関する記述を確認できない。大正 2 年と 3 年の 2 月 13 日には区で酒を購入しているようであり、現在の「おこない」に繋がるなんらかの行事がおこなわれていた可能性がある。

昭和 10 年の記録には 2 月 12 日に神供用のするめとみかんの購入、糯米の精米、神主への電話代、2 月 13 日に神官賄の出費記録があることから、この頃には現在の「おこない」に繋がるような、餅を使った行事がおこなわれていたと考えられる。ただし、餅まきがおこなわれていたかどうかは不明である。

昭和 19 年からの記録では、2 月 13 日に厄年のほか喜寿や米寿の人などが餅（もしくはもち米）、酒、金などを奉納していることがわかる。厄年などが奉納する酒などの量は年齢によってある程度の決まりがあるようである。同時に「氏子米」などの記載もあるが、現在の磯部町の「おこない」でみられる、新生児や転入者からの奉納というわけではないようである。1 例のみだが「氏子米」の奉納者に 61 歳厄年と同一人物が確認でき、これは厄年の出す米とは別の、氏子から集めた米のことであったと考えられる。磯部町では昭和 20 年代から現在の「おこない」とも共通するシステムによって行事がおこなわれていたようだが、餅をまいたかどうかは判然としない。

（6）中野町原

湧口文書『由来伝説聞集記』には「原区正月十三日睦月行イ日伝説」として、中野町原では明治 4 年まではいわゆる「らいし」をおこなっていたが廃止され、明治 26・27 年頃の日清戦争の年まで、厄年のものが小餅をまいていたという記述がある。ただし、この史料自体は昭和（おそらく 40 年代以降）に編纂された史料のため、信憑性についてはやや疑問が残る。

5．まとめ

（1）現在の「おこない」の実施形態

民俗行事としての「おこない」は、現地調査での聞き取りにもあきらかなように、時代によって少しずつその内容を変化させながら今日まで伝えられてきた。近年の大きな変化としては、かつて日付が固定していた開催日を休日に変更した点、餅搗き方法の変化がある。

開催日については、平成 12 年（2000）の祝日法改正に伴って変更したところもあるようだが、実際にはそれ以前から参加者が確保できないという問題が生じていたことが、聞き取り調査からもうかがえる。現在でも開催日が固定しているのは金谷町・寺中町・東清水町・沢町（下）・落井町・川島町・戸口町・中戸口町・上戸口町であるが、寺中町・沢町（下）・川島町についてはもともと祝日である 2 月 11 日に開催しており、落井町についても 1 月 3 日に変更することによって、参加者を確保している状況である。

餅搗き方法の変化については、現在ほぼすべてのところで餅屋に依頼もしくは餅搗き機を使って作っている状況である。聞き取り調査では、もともとは宿を決めて餅搗きをおこなっていたが、次第に公民館でおこなうようになり、近年では餅屋に依頼するようになったという状況がみてとれる。現在でも宿が存在するのは沢町（下）のみであり、公民館で餅搗きからおこなっているところも半数にも

満たない。

公民館や宿で餅搗きをおこなっているところでも、杵と臼を用いておこなうところはほぼ存在しない。川島町で写真撮影の際に一部使用している程度である。東芝未来科学館のホームページによると、日本初の家庭用餅搗き機が発売されたのは昭和 46 年（1971）であるという。伝統行事に機械化の動きがみられるようになったという、極めて近代的な変化といえる。

時代の変化に伴って変わってきた要素がある一方で、伝統として残されてきた要素もある。神事や餅の準備には女性も関わるようになってきてはいるが、依然として餅まきには女性は関わらない。福井市東大味町では女性も餅まきをおこなうが、特殊な事例とみるべきだろう。餅まきをおこなうのは主に厄年の男性だが、厄年女性の代理人がまくところもある。片山町では厄年の人の子どもがまいている。また、加えて区や神社の役員、餅まきの当番がまくところも多い。そのような中にあって、舟枝町と越前市寺地町の事例はやや特殊である。いずれも厄年男性ではなく、餅まきなどの神事を担当する「当番」が餅をまいている。

まく餅の形状については、「おかさ」と呼ばれる直径 50cm ほどの円形の餅と直径 10cm ほどの小餅がほとんどのところで共通していることが注目される。また、細かい部分での決まりごとに違いはあるが、還暦男性は紅色の餅をまくことが多い。餅のまき方にも共通点がみられる。ほとんどのところでおかさ、小餅の順にまくのを 2 回繰り返している。絵を描いた餅は作るところと作らないところがあるようだが、片山町のように大黒さんの顔を描くことが決まっているところもある。しかし、ほとんどのところでは描く絵に決まりはないことが多い。

もち米の供出については、町内一律もしくは厄年が多めに出すところと、厄年が出すところがある。金谷町においては、餅米の供出・餅搗きと餅まきが、厄年のものと町内のもので明確に区別されているということが注目される。

餅まき前の神事は、ほとんどのところでおこなわれているが、沢町（下）では昔から神事はおこなっていないようである。祈年祭と厄払いの神事をまとめておこなわれることが多い。なお、「おこない」を正月神事としてとらえている人と、正月神事とは別の厄払い神事としてとらえている人がいるようだが、はっきりとした傾向はつかめていない。

餅まきと付随して河和田町・片山町では、子ども向けの菓子まきがおこなわれる。また、金谷町ではこのような菓子まきでは女性もまいていたという聞き取りも得られている。餅まきの際に景品交換をおこなっている事例は落井町・戸口町・中戸口町・上戸口町で確認できる。北中山地区に多いが、沢町（上）でも「懸賞餅」というものがある。

ここまで、鯖江および周辺地域の「おこない」を概観してきたが、集落によっては特徴的な内容をもつものもある。別司町では「まゆ玉」と呼ばれる餅花の一種を曳きまわす。後述するように、これは「らいし」の影響によるものと考えられる。河和田町では「ムラノモチ」という梅の枝にさした小餅を餅まきの前にまく。これは『今立郡神社誌』などに記載のある、正月神事の名残、もしくは「らいし」の影響とも考えられる。沢町（上）と上河内町では壮年会が円陣を組んで境内を動き回ったり、厄年を投げるといったことがおこなわれている。尾花町の「殿上まいり」とも類似するが、関係は不明である。落井町で

は公民館において会食がおこなわれている。沢町（下）でも簡略化した形式のものがおこなわれている。川島町では「笹もち」と呼ばれるものを作り、餅まきの最初にまく。また、餅をまく人のことを「ほうらいし」と呼ぶのも特徴的である。

（2）行事内容の変遷

前述のとおり鯖江周辺の「おこない」は、集落（神社）ごとに微妙な違いをもちながら、それぞれ集落の伝統行事として今日まで伝えられてきた。この「おこない」については古くから地元の研究者に注目され、1940 年代初頭には齋藤優氏が、1970 年代には杉本伊佐美氏が精力的に調査をおこない、それらの調査報告がある。これらと今回の調査成果を中心に、主に昭和初期から現在までの行事内容の変遷をみていく（表）。

現在の「おこない」は、①正月に、②神社において、③厄年の男性が、④厄祓いのため、⑤餅をまく、行事として認識されているが、これらのうち③・④については、比較的新しい要素ではないかと考えられる。『今立郡誌』（1909 年）には、川島町の「蓬莱祀」における餅まきをおこなうのは「男子二十歳前後」とあり、上河端町の「団子撒」でも、宿の主人が団子をまいている。齋藤優氏の調査（齋藤 1940・1941）では、詳しい説明のある川島町・舟枝町・莇生田町・片山町・河和田町・北中町のうち、厄年が餅をまくとあるのは片山町と河和田町のみである。また、『片上村誌』（1931 年）には「四十二歳には男子の大厄として盛大に之を祝するものあり　神社仏閣へ鏡餅を供へ、祝宴を開くもの　正月に神社境内に於て、一般の餅撒き当日、合併して餅撒く者あり」、『鯖江市史民俗編』（1973 年）や杉本伊佐美氏の文献（杉本 1979 ほか）でも、椿坂町の「おこない」について、宮当番とともに、最近は 61 歳の厄年がいっしょに餅をまくようになったという記述がある。現在これらの集落では厄年が厄払いのために餅をまいていると認識されているが、莇生田町や片山町の区有文書でも厄年に関する記載が明治末から大正時代頃に始まっていることなどを考えれば、もともとは厄年の厄払い神事ではなかったと考えるべきだろう。

また、⑤の餅をまくという部分についても若干疑問符が付く。『今立郡誌』にある上河端町の「団子撒」や、齋藤（1940・1941）での舟枝町や莇生田町の事例にみられるように、もともとはもち米を搗いた餅ではなく、うるち米を粉にして作った団子であったと考えられる。横浜の事例かつ上棟式での事例だが、「棟上げの日にはグシ餅などゝ称して、棟に餅を供へる風は全国的であるが、その餅は多くは粢、即ち米の粉を水で固めたものであつた」（柳田 1948）という記録もある。

そもそも、餅を作るのにつかう米は現在では厄年や町内で出しているが、莇生田町・片山町・北中町・東清水町・上河内町では、過去の聞き取り調査においてかつては神田の米を使用していたようである。寺中町の河和田神社についても、『今立郡神社誌』に神田の米を餅にして撒いたという伝承があり、もともとは神田の米をつかった行事であったと考えられる。

本稿で対象とする行事は、現在では「オコナイ」という名称で呼ばれることが多いが、川島町・莇生田町・上河端町ではかつて、「ほうらいし」や「おらいし」などの名称で呼ばれていたことが知られる。川島町では現在は餅をまく人のことを「ほうらいし」と呼んでいるが、かつては「ササモチ」と串にさした小餅を俵に蓮華挿しにした「マイダマ」のこ

とを「オライシ」と呼んでいたという（藤本・小林 1980 など）。莇生田町の「莱祀」では、俵に蓮華挿しにした串餅（団子）を担いで運んだという（齋藤 1941）。上河端町の「御莱師」（江戸 1939）については行事の内容は詳しくわからないが、川島町・莇生田町についてはいずれも俵に蓮華挿しにした串餅が使われている点が共通する。『越前古名考』（1801 年）や『越前国名蹟考』（1815 年）によると、かつて三里山周辺の村々には「らいし」と呼ばれる正月の祭礼があったことが知られる。これは木のそりに餅を飾りつけた木の枝を載せて町内を曳きまわすもので、川島町・莇生田町でかつておこなわれていた「蓬莱祀」や「莱祀」は、この三里山の「らいし」の簡略化した形式のものであったと考えられる。そのように考えた場合、別司町で「まゆ玉」と呼ばれる餅花をトラックに載せて町内をまわるというものも、この「らいし」の影響によるものとみることができる。

現在の「おこない」において特徴的にみられる「おかさ」は、齋藤（1940・1941）に記載があることから、少なくとも昭和初期には存在したと考えられる。ただし、川島町に関しては、『今立郡誌』（1909 年）、齋藤（1940）ともに記載がなく、戦後になってからはじめられたという証言がある（齋藤 1999）。また、舟枝町・莇生田町についても齋藤（1940・1941）に記載がないことからすると、戦後作られ始めたと考えられる。川島町の「笹もち」についても、大正 12 年の旱魃の際、雨乞いをおこなった名残であると伝わっており（齋藤 1998）、『今立郡誌』には記載がない。初出が齋藤（1940）であることも考えると、上述の伝承の信憑性はともかくとして、少なくとも「笹もち」は 1909 年から 1940 年の間に作られ始めたと考えられる。

（3）今立郡域における「オコナイ」の分布と実施内容

「オコナイ」という名称をもつ行事は、西日本の広い範囲に分布する（中島 1999 など）。（旧）今立郡域においても「嶺北南部から若狭にかけてオコナイの名を持つ行事がいくつか報告されている。嶺北の場合は餅まき、面の神事、簡単な神事と直会だけ、などさまざまである」（福井県教育委員会編 2001）、「餅まきはなくてもオコナイは鯖江市・今立町を中心とする旧今立郡には一円に行われ、村で日が古来一定していて今も一部に行われ、それはモツツキ又は礼日とも言い年始日である」（齋藤 1965）などとされており、広く分布することが知られている。しかし、これらの記述からは行事内容にバリエーションがみられることを示唆してはいるものの、それについての詳しい言及はない。ここでは、鯖江の「おこない」の位置づけを考えるため、旧今立郡域における「オコナイ」を概観しておきたい。

『武生市史　民俗篇』（1974 年）では「オコナイというのは一般にモッツキといわれている、年頭日のことで正月六日・七日ごろ親類を招いてのお年始である」としており、特別な行事を伴わない場合もあるようである。齋藤（1965）の記述と併せて、本来は年頭日・年始日のことを指していたと考えられる。年頭日・年始日については、「年頭　その区によりて年頭日か定まつてをり、当日は親戚を招きて年頭の喜びを祝し合ふ」（稲倉 1937）、「礼日即ちお年頭。一名これをモッツキとも呼んでいた」（ふるさと赤坂の歩み編集委員会 1985）などともある。

「オコナイ」の日に行事をおこなっているところでは、共同飲食をおこなう場合や餅まきをおこなう場合が多い。越前市平林町の「オコナイトウ」（斉藤 1989）や、越前市大谷町

の「おこない」（長谷川 2005）、越前市水間町の「堂の講」（為永 2005）などでは、共同飲食をおこなっている。越前市国中町の「惣田正月十七日講」（ごんぼ講）は、共同飲食（直会）の一種で大盛りのごぼう料理を食べるという特色ある行事として知られるが、「之等の人々は之が此の村の「おこなひ」であると答へて居た」（齋藤 1941）という戦前の証言があり、かつては「オコナイ」として認識されていたようである。越前市柳元町では 70 年ほど前まで、お宮の囲炉裏で火を焚きながら酒を汲み交わして夜明かしをし、若い衆に太鼓を叩きながら村中を廻らせたとある（国定 2005）が、これらについても共同飲食の一種と言えるだろう。

「オコナイ」の日の行事として餅まきをおこなう地域は、前節でみたように鯖江市河和田・北中山・片上・中河地区、越前市服間地区の一部という、おおよそ今立郡の北部に集中する。対して共同飲食をおこなう地域は、餅まきと比較して事例が少ないものの、今立郡の南部に多くみられる。

越前市北日野・味真野・岡本地区には「堂の講」・「堂の餅」などの名称をもつ秋から春にかけておこなわれる共同飲食や餅の分配をおこなう行事が散見される（福井県今立郡誌編纂部 1909・福井県神職会今立郡支部 1919 など）。岩本町の「花の堂」は、あきらかに新年の行事としておこなわれており（ふるさとかたりべ協議会（岡本地域）1999）、「おこない」との関連が想定される。また、これらの「堂の講」・「堂の餅」では、神田の米を使っておこなわれるという点が、もともとの「おこない」と共通する。そのように考えた場合、餅まきと堂の講などの共同飲食が相互補完的な分布を示していることが注目される。

また、「オコナイ」の日の行事としてかつて左義長をおこなっていたという、越前市南中山地区での証言もある（今立町仲山区 50 年史編纂委員会 1990）。

（4）鯖江の「おこない」

ここまで、現在の「おこない」の実施形態、過去の調査記録、今立郡域における「オコナイ」および関連する行事の分布をみてきたが、ここでは 4 章でみてきた文書記録と併せ、鯖江の「おこない」の歴史的変遷や民俗学的な位置づけを考える。

餅まきとしての「おこない」の史料的な初出は、片山町の『神田帳』にある明和 6 年の記述である。それ以前から神事に関する記録はあるものの、餅をまいていたかどうかは不明である。しかし、「食喰人数」が明示されていることからすれば、不特定多数に向かって餅をまくような行事であったとは考えにくい。おそらく神人共食の神事としての「直会」が基になり、それがどこかの段階で餅まきや餅の手渡し（分配）へと変化したと考えるべきであろう。柳田國男は餅まきについて「どうして又餅の如くめでたい大切な食物を幾ら拾ふ人が有るかたとても、土の上に撒き散らすことになつたのか。少なくともこれが国の初めからの、慣行のまゝで無かつたことは推定してもよいのではあるまいか」「もとは寧ろ余りに多くの御参りの人が来るので、斯うでもしなければいはゆる直会の趣旨を、徹底することが出来ぬと思つたからであらう」（柳田 1948）と述べている。

また、片山町の「おこない」記録が『神田帳』と呼ばれていることは重要である。今立郡域において「堂の講」・「堂の餅」の分布と餅まきの分布が相互補完的になっていることは、もともと今立郡域には神田の米をつかった行事としての共同飲食（「堂の講」）や餅の

分配（「堂の餅」）が存在し、それらが北部のある場所で餅まきをするようになり、周辺に広がったということを示唆する。

明治時代以降はさまざまな変化が起こった。明治末には神社の整理がおこなわれ、一部の神社・神田は廃止され、「おこない」は一時中断された。しかし、多くの神社が後に復帰し、米の供出方法を変化させることによって「おこない」も復活した。

大正時代頃からは、次第に厄年が「おこない」に関わってくるようになる。さらには餅まきにも参加するようになり、戦後にかけて厄払い餅まき神事として定着していく。現在では年齢は満年齢で数えるが、かつては数え年であり正月は年取りの時期であった。年を越して厄年になったものが、正月行事の一環として厄払いをおこなうということは、ごく自然に生まれてきたものだろう。江戸時代や明治時代の記録（『近世風俗志』（江戸後期）や『絵本風俗往来』（明治 38 年）など）にも、大晦日や冬至・節分の時期におこなわれていた厄払いの様子が出てくる。厄年の厄払い方法の類型については、井之口（1975）がまとめているが、その中で餅まきは（３）「餅や豆をまく。節分の豆まきなどの場合にも、厄年の者がまくことがある」としている類型にあたる。かつての旧暦の正月は節分とほぼ同じ時期であり、まくものは違っても、厄や鬼を払うという意味合いが混同されたということもあったのであろう。これらの背景があって現在のような、厄払い餅まき神事としての「おこない」が成立したと考えられる。

第二次大戦以降はさらに大きな変化があった。ひとつは神事や事前準備に女性が参加するようになったことである。現実的には人手不足を補うという意味もあっただろうが、神事というものに対する意識が変化してきたことを示しているものだろう。そしてもうひとつの変化は餅搗きの機械化である。伝統行事の中にも効率化が導入されるという、きわめて近代的な変化といえる。そして、平成に入ってからの開催日時の変更は、主催者や参加者の便宜を図る現実的な理由である。

おわりに

本稿では、「おこない」の現状とその歴史的変遷の一端をあきらかにしてきた。しかし、本稿において指摘した、「おこない」と「堂の講」・「堂の餅」との関係は、すでに斉藤（1979）によって指摘されていたものである。それにもかかわらず、それが省みられてこなかったのは、ひとつはこれまで浄土真宗がもつ反民俗的な性格により、北陸地方は民俗の空白地域といわれてきたことがあるのかもしれない。ほかの民俗事象・行事に関しても研究は少ないのが現状である。しかし、浄土真宗寺院が大多数を占める鯖江市東部地域において、厄払い神事としての「おこない」が濃密に分布する状況があらためて明らかとなった。そもそもなぜ、厄払いの意味が大正時代頃に付加されてきたのか、近江のオコナイや岐阜県美濃地方などでおこなわれている餅まき行事との関係、いわゆる「らいし」との関係など、まだまだ解明すべき点は多い。

鯖江の「おこない」は時代によって少しずつその形を変えながら、おそらく 200 年以上にわたって伝えられてきた。変化は常に歴史の文脈の中で生じる。齋藤優氏が戦前に指摘した「之は単に我々の眼前に無意識の中に変化しつゝ有る行事の一断面に過ぎない」（齋藤 1940）という言葉は、まさしくその通りなのだと思う。

所在地	神社	名称	日付	米提供	餅搗き	餅撒き	神事	餅の種類			備考	文献
								かさ	小	まゆ		
別司町			2/8									齋藤（1941）
別司町			1/7	厄年男25・42・60 厄年女17・19・33	青年団員	厄年				○		鯖江市史編纂委員会（1973）
別司町	八幡神社		1/7			厄年男		○	○	○		杉本（1979・1987・1996）
別司町	八幡神社	厄祓餅まき										福井県神社庁（1994）
別司町	八幡神社		（1/13）	厄年・氏子		厄年男25・42・61	厄年男25・42・61 厄年女19・33 宮総代・役員	○ □	○	○	昔は2/7に開催 ここ10年ほどで成人の日（前の日曜日）に変更	市教委調査（2014.1.13）
河和田町	敷山神社		旧1/25							○	餅撒きではないが、『福井県神社誌』では 現在の「おこない神事」の祖形としている	福井県神職会今立郡支部（1919）
河和田町			2/14	氏子	前・当・後厄男（24～26）、 厄年男42・61・隣近所・親戚	前・当・後厄男（24～26） 厄年男42・61		○	○	○	明治末年までは2/25に開催	齋藤（1941）
河和田町						厄年男61	厄年男				この餅を食べるとマラリアにかからないと言われていた 170年ほど前からおこなわれている 戦時中は中止された、昭和28年に復活	鯖江市史編纂委員会（1973）
河和田町	敷山神社		1/14			厄年男42・61	厄年男42・61 厄年女19・33	○	○	○	女性の神事参加は戦後から	杉本（1976・1979・1987・1996）
河和田町			2/7								別司町の間違いかもしれない	斎藤（1989）
河和田町	敷山神社	おこない神事	1/14									福井県神社庁（1994）
河和田町	敷山神社		（1/12）		餅屋に依頼	厄年男42・61	厄年男25・42・61 厄年女19・33 区長・役員		○	○		市教委調査（2014.1.12）
莇生田町		菜祀	2/17			7・8歳の男の子と父親		○	○	○	昔は1/17に開催 近年までは餅ではなく団子撒き	齋藤（1941）
莇生田町			1/17					○				鯖江市史編纂委員会（1973）
莇生田町	八幡神社		1/17			厄年男42・61					昭和6年まではだんごを撒いた	杉本（1976・1979・1987）
莇生田町	八幡神社		（1/18）			厄年男25・33・61 区長・神社役員	厄年男25・42・61 厄年女19・33 区長・神社役員	○	○		平成22年までは1/17に開催 平成23年から1月第3土曜に変更	市教委調査（2014.1.18）
片山町			2/11	厄年・出番境地 ・新生児	（女性は参加しない）	厄年男42・61 25までの男（1回）		○	○	×	明治末年までは2/15に開催	齋藤（1941）
片山町			1/10			厄年男42・61						鯖江市史編纂委員会（1973）
片山町	八幡神社		1/10			厄年男42・61					餅を福餅と呼ぶ	杉本（1976・1979・1987・1996）
片山町	八幡神社										漆器職人の元服の儀式がもとになっている 戦時中までは2/11に開催 昭和35年頃から復活	片山町誌推進協議会（1978）
片山町	漆器神社										漆器職人の元服の儀式がもとになっている 元和3年から伝わる	三輪（1979・1982）
片山町											400年近く続いている 江戸時代には1/15に開催	歴史・口碑グループ（2004）
片山町	八幡神社		（1/13）		厄年が餅屋から購入	厄年男25・33・61 区長・神社役員・神官・厄年の人の子ども	厄年男25・42・61 厄年女19・33 区長・神社役員	○	○		かつては1/10に開催 平成に入ってからの祝日法改正により 1月第3月曜日に変更	市教委調査（2014.1.13）
西袋町			2/8									齋藤（1941）
西袋町			1/6	厄年・区	青年団員 （女性は参加しない）	厄年男61（25・42は不明） 神社当番	厄年全員・区長・総代 神社当番・区民					鯖江市史編纂委員会（1973）
西袋町	熊野神社		1/6			厄年男25・42・61 神社当番	厄年男25・42・61 厄年女19・33 区長・神社総代・神社当番				昭和36年までは2/8に開催	杉本（1979・1987・1996）
西袋町	熊野神社	厄祓餅まき	1/6									福井県神社庁（1994）
西袋町	熊野神社		（1/12）		厄年が餅屋から購入	厄年男25・33・61 神社役員・厄年の人の家族	厄年男25・42・61 厄年女19・33 区長・神社役員	○	○		かつては2/9に開催 新暦になってから1/6に変更 平成に入ってから1月第2日曜に変更	市教委調査（2014.1.12）
椿坂町			1/5		宮当番宅 （女性は参加しない）	厄年男61 宮当番					厄年男が撒くようになったのは最近	鯖江市史編纂委員会（1973）
椿坂町	八幡神社		1/5			厄年男61 宮当番					古くは2/8に開催 厄年男が撒くようになったのは最近	杉本（1979・1987・1996）
椿坂町	八幡神社	厄祓餅まき	1/5									福井県神社庁（1994）
											絵餅あり 2003年は菓子まきもおこなわれた	市橋（2001・2003）
椿坂町	八幡神社		（1/11）		厄年（女性も参加） 宮当番・手伝い	厄年男42・61 宮当番	厄年男25・33・61 厄年女19・33 区長・村役・宮当番	○	○		かつては2/8に開催？ 数年前までは1/5に開催 以前は17女も厄年として神事に参加	市教委調査（2015.1.11）

河和田地区 1

所在地	神社	名称	日付	米提供	餅搗き	餅撒き	神事	餅の種類			備考	文献
								かさ	小	まゆ		
金谷町			2/17									齋藤（1941）
金谷町			1/17					○				鯖江市史編纂委員会（1973）
金谷町	白山神社		1/17	厄年・氏子		厄年男25・42・61	厄年男25・42・61 厄年女19・33	○				杉本（1979・1987・1996）
金谷町	白山神社	厄祓餅まき	1/17									福井県神社庁（1994）
金谷町	白山神社		1/17	厄年・各家		厄年男25・42・61	厄年男25・42・61 厄年女19・33 区長・役員・宮総代・当番					市教委調査（2014.1.17）
寺中町	河和田神社	（於古那比）餅撒	1/13								明和年間から続く 明治43年廃止	福井県神職会今立郡支部（1919）
寺中町			2/11									齋藤（1941）
寺中町			2/11	各家	氏子総代宅で青年団が搗く	厄年代表・区長 神官・総代・青年団長						鯖江市史編纂委員会（1973）
寺中町	河和田神社		2/11		氏子総代宅	厄年男・区長・神官 総代・青年団長						杉本（1979・1987）
寺中町	河和田神社	厄祓餅まき神事										福井県神社庁（1994）
寺中町	河和田神社		2/11	厄年		厄年男25・42・61	厄年男25・42・61 厄年女19・33					市教委調査（2014.2.11）
北中町			2/11	区	出番垣内			○	○			齋藤（1941）
北中町	八幡神社	餅撒き	1/11			厄年男42・61 宮当番（1名）					昭和5年には2/11に開催 昭和35年から1/11に開催	杉本（1979）
北中町											神田の米を使用 明和年間から1/13に開催 寺中の間違いかもしれない	歴史・口碑グループ（2004）
北中町	八幡神社		（1/13）	厄年・各家	厄年は餅搗きに参加しない （絵だけ描く）	厄年男33・61	厄年男25・42・61 厄年女19・33 区長	○	○		かつては2/11に開催	市教委調査（2014.1.13）
東清水町			2/11									齋藤（1941）
東清水町	稲荷神社	おこない	1/15	厄年男25・42・60 厄年女17・19・33					○		昭和35年までは2/11に開催	山岸（1972）
東清水町			1/15	厄年男25・42・60 厄年女17・19・33 神田	厄年男25・42・60 厄年女17・19・33 宮当番						還暦の人が主役となる	鯖江市史編纂委員会（1973）
東清水町	稲荷神社	餅まき	1/15	厄年男25・42・60 厄年女17・19・33		厄年男25・42・61			○		昭和2年ごろ廃止？ 昭和35年までは2/11に開催	杉本（1979・1987・1996）
東清水町											神田の米を使用	歴史・口碑グループ（2004）
東清水町	稲荷神社		（1/11）		当番が餅屋に依頼	厄年男25・42・61	厄年男25・33・61				かつては2/11に開催 1/15に変更 平成23年に変更	市教委調査（2015.1.11）
尾花町			2/12									齋藤（1941）
尾花町	禅定神社	厄祓い餅まき	1/12									福井県神社庁（1994）
尾花町	禅定神社 （刀那神社）		（1/11）	厄年・各家		担当班の前・本・後厄男（41～43）	厄年男25・42・61 厄年女19・33				かつては2/11前後に開催 ここ10数年で変更	市教委調査（2015.1.11）
尾花町	禅定神社	殿上参り	2/5								青年団が中心となる	鯖江市史編纂委員会（1973）
尾花町	禅定神社		2/5								青年団が中心となる	杉本（1979・1987）
尾花町			2/第1日								かつては2/5 400年前から	NPO法人かわだ夢グリーン（2004
尾花町	禅定神社	殿上まいり	（2/6）	厄年男25・42・61 厄年女19・33 （前厄・後厄含む）	当番班長ほか	厄年男			○			市教委調査（2005.2）
沢町（上）			1/9			厄年男25	厄年男25・42・61 厄年女19・33				昔は三社森にて沢・尾花合同で開催	杉本（1979・1987・1996）
沢町（上）	白山神社		（1/11）	厄年・各家	（女性も参加）	厄年男42・61・米寿 （神主）		○	○		建国記念日制定の翌年～約20年前までは1/9 それ以前は旧正月（2月）に開催	市教委調査（2015.1.11）
沢町（下）			1/11			厄年男25	厄年男25・42・61 厄年女19・33				昔は三社森にて沢・尾花合同で開催	杉本（1979）
沢町（下）												池田（1983）
沢町（下）	刀那神社		2/11	厄年・各家		厄年男42・61	なし	○	○			市教委調査（2014.2.11）
上河内町			2/8									齋藤（1941）
上河内町			1/8	厄年・神田	区長宅で青年団が搗く	厄年男25（青年団員）					明和3年から	鯖江市史編纂委員会（1973）
上河内町	白山比■神社	餅まき	1/8		区長宅	厄年男25					昔は餅搗き（餅まきも？）は旧正月におこなった	杉本（1979・1987・1996）
上河内町	白山姫神社	厄祓餅まき	1/8									福井県神社庁(1994)
上河内町											神田の米を使用	歴史・口碑グループ（2004）
上河内町	白山姫神社		（1/11）	厄年男・区	公民館	厄年男25・42	厄年男25・42・61 厄年女19・33				15～16年ほど前までは1/8に開催	市教委調査（2014.1.11）

所在地	神社	名称	日付	米提供	餅搗き	餅撒き	神事	餅の種類			備考	文献
								かさ	小	まゆ		
落井町			1/5									北中山村公民館（1950）
落井町		（おこない）	1/5			厄年男25・42・61	厄年男25・42 厄年女19・33 還暦男女					田中（1972）
落井町			1/5			厄年男25・42・61 区長・神主・宮総代		○	○			鯖江市史編纂委員会（1973）
落井町		もちまき	1/5					○			字が書いてある餅を拾うと景品と交換 おかさは厄払いのためにまく	掃部（1981）
落井町		厄払いのもちまき	1/5		公民館でおこなう	厄年男25・42 還暦男						佐々木（1981）
落井町			1/3		公民館でおこなう 厄年男25・42・61	厄年男25・42・還暦男 区長・農家組合長 宮総代代表・宮司	厄年男25・42 厄年女19・33 還暦男女 区長ほか役員・宮総代	○	○		会食あり 景品交換あり	市教委調査（2015.1.3）
松成町			2/8									北中山村公民館（1950）
松成町		（おこない）	1/8			厄年男25・42・61	厄年男25・42・61 厄年女19・33					田中（1972）
松成町			1/8									鯖江市史編纂委員会（1973）
松成町												福井県神社庁（1994）
松成町			（1/5）		厄年と家族1名	厄年男25・42・還暦男 宮総代・副宮総代・宮司	厄年男25・42 厄年女19・33 還暦男女 区長ほか役員・宮総代	○	○			市教委調査（2014.1.5）
川島町	加多志波神社	蓬莱祀	旧1/18	斎戒者		男20前後			○		餅は串に刺し、棟俵に蓬華挿しにした	今立郡誌編纂部（1909）
川島町	加多志波神社	おこなひ	2/11	餅をまく人		男25・26前後			○	（笹餅）	小餅は串に刺される 明治末までは正月18日	齋藤（1940・1957・1965）
川島町			2/11									北中山村公民館（1950）
川島町		（おこない）	2/11			男25 婿に来た人	厄年男25 厄年女19・33			（さき餅）		田中（1972）
川島町		おこない・おらいし・蓬莱祀	2/11								江戸時代にはすでに行われていた	鯖江市史編纂委員会（1973）
川島町		おこない	2/11									三輪（1976）
川島町		もちまき	2/11	餅をまく人	餅をまく人	厄年男25		○	○	（さきもち）	餅まきの最初に塩をまく 昔は小餅は串に刺していた 300年前からある	酒井（1980）
川島町		おこない	2/11	餅をまく人	餅をまく人	厄年男25	厄年男25 厄年女19・33	○	○	（粉もち）	昔は小餅を20cmくらいの串に刺し、俵にさしてい	木戸（1980）
川島町	加多志波神社	オコナイ・オライシ	2/11	餅をまく人		男25前後						藤本・小林（1980）
川島町	加多志波神社	鬼オコナイ	2/11							（ハコ餅）		朝比奈（1982）
川島町		蓬莱祀餅まき・おこ	2/11	餅をまく人		厄年男25				（笹餅）	笹餅は大正12年の旱魃の際に雨乞いをおこなった名残 戦時中(昭和13～22年)は区長1人が餅まきをした 戦後おかさがまかれるようになり、小餅は串に刺さなくなった	竹内（1984） 齋藤（1998・1999）
川島町	加多志波神社	おこない	2/11									福井県神社庁（1994）
川島町			2/11		「ほうらいし」とその夕	男25	厄年男25・42・還暦男 厄年女19・33 区長ほか役員 宮総代・副宮総代	○	○	（粉もち）		市教委調査（2014.2.11）

北中山地区１

所在地	神社	名称	日付	米提供	餅搗き	餅撒き	神事	餅の種類			備考	文献
								かさ	小	まゆ		
戸口町			2/10									北中山村公民館（1950）
戸口町		（おこない）	1/9			厄年男42・61	厄年男42・61 厄年女19・33					田中（1972）
戸口町			1/9									鯖江市史編纂委員会（1973）
戸口町		もちまき	（正月）									大久保（1981）
戸口町		餅まき神事										福井県神社庁（1994）
戸口町			1/9	厄年		厄年男25・42・61 区長・神主	厄年男25・42・61 厄年女19・33 区長・役員・宮総代	○	○			市教委調査（2014.1.9）
中戸口町			2/6									北中山村公民館（1950）
中戸口町		（おこない）	1/6	婿に来た人 嫁に来た人		厄年男25・42・61	厄年男25・42・61 厄年女19・33 1歳児					田中（1972）
中戸口町			1/6									鯖江市史編纂委員会（1973）
中戸口町		厄年の餅まき										福井県神社庁（1994）
中戸口町			（1/6）			厄年男25・42・61 区長・宮総代・神主	厄年男25・42・61 厄年女19・33 区長・宮総代	○	○			市教委調査（2014.1.6）
上戸口町			2/10									北中山村公民館（1950）
上戸口町		（おこない）	1/8			厄年男25・42・61	厄年男25・42・61 厄年女19・33					田中（1972）
上戸口町		おこない	1/8	厄年男25・42・61	厄年男25の家でおこなう	厄年男25・42・61 神主	（あり）	○	○			鯖江市史編纂委員会（1973）
上戸口町		もちまき	（1月）	厄年男25・42・61	厄年男25の家でおこなう	厄年男25・42・61		○	○		絵餅・厄餅がある	宝賀（1981）
上戸口町			1/8	厄年男25・42・61		厄年男25・42・61 宮司	厄年男25・42・61 厄年女19・33 区長・宮総代	○	○			市教委調査（2014.1.8）
磯部町			2/13									北中山村公民館（1950）
磯部町		おこない・餅まき	1/15	1歳児1、5歳児（長男） 婿に来た人 嫁に来た人		厄年男25・42・61	厄年男25・42・61 厄年女19・33 1歳児、5歳児（長男）					田中（1972・1990）
磯部町			1/15	厄年男42・61 区・新嫁・新生児・5歳児		厄年男 区長・神主						鯖江市史編纂委員会（1973）
磯部町		もちまき	1/15	餅をまく人	餅をまく人	厄年男25・42・61					25・42・61歳と書いてある餅は景品と交換（昔はなかった） 戦時中は中止している 昔は13日だった	伊藤（1981）
磯部町		厄祓い餅まき	1/15									福井県神社庁（1994）
磯部町			（1/12）	厄年		厄年男25・42・61	厄年男25・42・61 厄年女19・33 新生児・転入者 地区・宮の役員	○	○			市教委調査（2014.1.12）

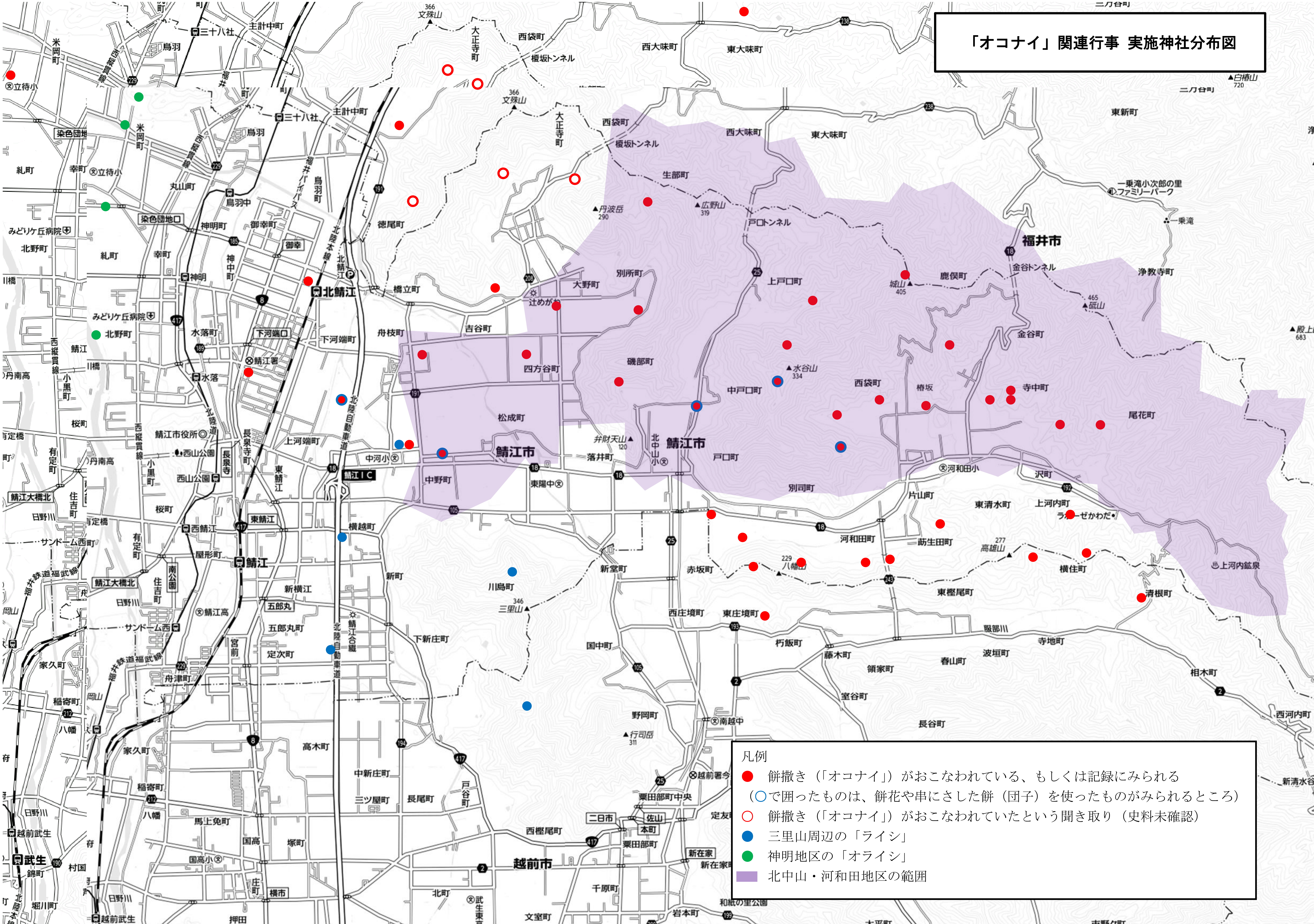
北中山地区 2

所在地	神社	名称	日付	米提供	餅搗き	餅撒き	神事	餅の種類			備考	文献
								かさ	小	まゆ		
四方谷町			1/上旬			厄年男	厄年				餅まきではなく神社への寄進や法座、記念品配りなどをする年もある	鯖江市史編纂委員会（1973）
四方谷町		厄年の餅まき・おこ	2/15			厄年男25・42・61	厄年男25・42・61 厄年女19・33	○	○			前田（1995）、西川（1995）
四方谷町						厄年男・厄年女の代理人	（あり）				1969年頃まではやっていた	市教委聞き取り（2015.1.31）
大野町											50年ほど前にはやっていた	市教委聞き取り（2015.1.31）
乙坂今北町			1/5			厄年	（あり）					鯖江市史編纂委員会(1973)
乙坂今北町						厄年		○	○		60年ほど前にはやっていた	市教委聞き取り（2015.1.31）
中野町樋口	白山神社	（団子まき）	1/7	各家		区長・役員						鯖江市史編纂委員会(1973)
中野町樋口	白山神社	団子撒き	正/7	各家		区長・区の役員			○		餅は麻がらに刺す 中野神社に合祀されるまで	後藤（刊行年不明）
上河端町		団子撒き・行い	1/14	各家	宿でおこなう 7～12歳の男の子	宿の主人			○		明治42年廃止 宿を探して村中を歩き回る	今立郡誌編纂部（1909）
上河端町		（団子まき）	1/14	各家	宿でおこなう 7～12歳の男の子						明治42年廃止	鯖江市史編纂委員会（1973）
中河 (上河端町?)		御薬師・団子撒・オコナヒ	1/15	各家	宿でおこなう 村中の青中年	宿の主人					宿は家屋を新築した・新嫁を迎えた・主人が厄年などの家と交渉して決める 厄年は酒を奉納する 左義長も同じ日におこなう	江戸（1939）
舟枝町		団子撒き	非公開	各家	宿	当番の4軒	（あり）				昔は1/10	齋藤（1940）
舟枝町	白山神社		非公開	各家							昔は1/10	鯖江市史編纂委員会（1973）
舟枝町	白山神社	おこない・もち配り	非公開	各家	公民館でおこなう	当番の家（4軒）の主人	厄年男25・42・還暦男 厄年女19・33				昔は1/12 昔は「団子まき」と言った	市教委聞き取り（2015.1.23）
杉本町	天満神社	オコナイ	非公開			その年の兵隊検査の人達					昭和初期まで	ふるさと立待編さん委員会（1994）

片上・中河・立待地区

所在地	神社	名称	日付	米提供	餅搗き	餅撒き	神事	餅の種類			備考	文献
								かさ	小	まゆ		
朽飯町			2/11									服間村国民学校（1943）
朽飯町			2/11					○	○		餅をまく人は黒い着物	岸塚（1987）、池田（1987）
朽飯町											現在でもおこなっている	市教委聞き取り（2015.1.21）
藤木町			2/15									服間村国民学校（1943）
藤木町											現在でもおこなっている	市教委聞き取り（2015.1.21）
領家町			2/12									服間村国民学校（1943）
高岡町			2/7									服間村国民学校（1943）
春山町			2/10									服間村国民学校（1943）
春山町	敷山神社										現在おこなっていない	市教委聞き取り（2015.1.21）
波垣町			2/12									服間村国民学校（1943）
寺地町			2/10									服間村国民学校（1943）
寺地町	刀那神社			各家	公民館でおこなう	当番		○	○			市教委聞き取り（2015.1.21）
横住町												服間村国民学校（1943）
横住町			1/15	各家	当番の1人の家でおこな	厄年男25・42・61 当番の家の男性					当番5軒	わたなべ（1974）
横住町	白山神社	オコナイ	1/15	各家 宮当番5軒	宿でおこなう	厄年男25・42・61	厄年男25・42・61 厄年19・33	○	○			藤本（1981）
横住町		もちまき	1/16					○	○			五十嵐（2000）
横住町		もちひろい	1/11									うの（2004）
横住町	白山神社	おこない	旧1/15			厄年男25・42・61						渡邊（2005）
横住町	白山神社			各家	餅屋に依頼	厄年男25・42・61 当番5人		○	○			市教委聞き取り（2015.1.21）
相木町			2/8									服間村国民学校（1943
清根町			2/18									服間村国民学校(1943)
清根町	春日神社	おこない	2/18								今はおこなわれていない	為永（2005）
西河内町			2/11									服間村国民学校（1943）
室谷町			2/19									服間村国民学校（1943）
室谷町		もちまき									「どんどやき」も同じ日におこなっている 「みかん」と書いてある餅を拾うとみかんがもらえる	高橋（2000）
室谷町	水間神社	祈年祭・厄除・おこない	1/11	厄年		厄年男25・42・61 宿	厄年男25・42・61 厄年女19・33・61					武安（2005）
室谷町											現在でもおこなっている	市教委聞き取り（2015.1.21）
上細江	栗島神社	団子まき	2/9			鍵主・氏子総代、世話役	(あり)				厄年が奉納した鏡餅やみかんもまかれる	ふくい中央婦人学園（1982）
上細江	栗島神社	団子まき	2/9									斉藤（1989）
上細江	栗島神社	だんごまき	2/9	各家							400年以上前から伝わる	福井新聞web版（2012/02/09）
東大味町	八幡神社	もちまき	1/15			厄年	(あり)				80年ほど前に始まった	福井新聞web版（2012/01/16）
東大味町	八幡神社	餅まき・おこない		厄年男女		厄年男25・42(・61) 厄年女19・33(・61)	(あり)		○			市教委聞き取り（2015.1.30）

その他地区


「オコナイ」関連行事 実施神社分布図
凡例
餅撒き（「オコナイ」）がおこなわれている、もしくは記録にみられる
（○で囲ったものは、餅花や串にさした餅（団子）を使ったものがみられるところ）
餅撒き（「オコナイ」）がおこなわれていたという聞き取り（史料未確認）
三里山周辺の「ライシ」
神明地区の「オライシ」
北中山・河和田地区の範囲
鯖江市
福井市
越前市

謝辞

現地調査および本稿をまとめるにあたって、各区の区長、宮総代・宮当番の方々をはじめ地元の方々には多大な協力をいただき、また、鯖江市文化財調査委員会の山岸 誉氏には調査方法等詳細なご指導とご教示をいただいた。改めて感謝申し上げる。

調査指導（鯖江市文化財調査委員会）

山岸　誉（民俗資料担当）
小谷正典（歴史資料担当）
大嶋俊子（歴史資料担当）（当時）

調査員（鯖江市教育委員会文化課）

前田清彦
深川義之
藤田　彩
竹内信夫（当時）
安達俊一（当時）
小林拓也（当時）

【註】

先行研究では、本稿において対象としている行事の名称表記が一定していない。ここでは基本的に「おこない」と表記することとした。2・3 章および 5 章の一部では、住民による呼称を鉤括弧（「」）付きで表している。そのため、この行事一般を表す場合と住民による呼称を区別するため、住民による呼称の場合はカタカナ表記（「オコナイ」）とした。

【参考文献】

福井県今立郡誌編纂部編『今立郡誌』(福井県今立郡役所、1909)
福井県神職会今立郡支部編『今立郡神社誌』(福井県神職会今立郡支部、1919)
伊藤百助『男大迹部志』(南越花筐会、1931)
宮本清十郎編『片上村誌』(片上村誌刊行会、1931)
稲倉憲澄編『南中山村誌』(南中山村役場、1937)
石橋重吉「『莱祀』と『迹皇の餅』」(『南越民俗』(7) pp.18-19、1938)
江戸喜久治編「正月行事座談会」※中河村上河端の話者は中村九郎右衛門（『南越民俗』2（2）pp.5-28、1939)
齋藤優「今立郡の『おこなひ』」(『南越民俗』(12) pp.16-19、1940)
齋藤優「今立郡のおこなひ（二）」)（『南越民俗』(13) pp.16-20、1941)
服間村国民学校編『[服間村]郷土調査』(服間村国民学校、1943)
柳田国男「村のすがた」(『定本柳田国男集第二十一巻』、1948※全集での出版は 1970 年だが原本の出版年に合わせた)
北中山村公民館編『北中山村誌』(北中山村役場、1950)
齋藤優「10 鯖江市川島町」(『福井県民俗資料緊急調査報告書』pp.37-40、福井県教育委員会、1965)
田中幸編『村誌　ふるさと北中山』(北中山小学校同窓会、1972)
山岸甚左エ門「東清水町の年中行事」(『南越』(33)、pp.28-32、1972)
杉本伊佐美『若越民謡大鑑』(福井県郷土誌懇談会、1973)
鯖江市史編纂委員会編　『鯖江市史（第一巻）』(鯖江市役所、1973)
斎藤槻堂『日本の民俗　福井』(第一法規出版、1974)
わたなべみわ「もちまき」(『ふくま』(3) pp.1-2、今立町服間小学校、1974)
杉本伊佐美「上河内の餅搗き行事」(『南越』(39) pp.8-9、南越文化財研究協議会、1975)
井之口章次「厄年および年祝い」(『日本の俗信』pp.115-142、弘文堂、1975)
杉本伊佐美「河和田の「おこない」」(『えちぜんわかさ』（2）pp.20-22、1976)
三輪信一「重要文化財　川島の「お面さま」」(『広報さばえ』(285) p.6、1976)
鯖江市片山町誌推進協議会編(『片山町誌　第一集』、1978)
斎藤槻堂『ふるさと味間野』(武生市味間野公民館、1979)
杉本伊佐美編著『回想・河和田の里』(「回想・河和田の

里」刊行会、1979）
三輪信一「やんしき踊りと漆器神社」(『広報さばえ』(327) p.8、1979）
木戸理子「おこないの今と昔」(『卒業記念郷土学習　ふる里のむかし』pp.127-129、北中山小学校、1980）
酒井正之『卒業記念郷土学習　ふる里のむかし』(「川島町のもちまきとお面さま」pp.123-127、北中山小学校、1980）
藤本良致・小林一男『生きている民俗探訪　福井』(第一法規出版、1980）
藤本良致「オコナイ」(『今立町誌（第 3 巻）』pp.190-191、今立町役場、1981）
掃部孝宏「落井町の昔の行事」(『ふる里のむかし　昭和 56 年度卒業記念郷土学習（第 2 集）』pp.17-19、北中山小学校、1981）
伊藤美智子「昔からやってきた行事」(『ふる里のむかし昭和 56 年度卒業記念郷土学習（第 2 集）』pp.30-32、北中山小学校、1981）
大久保夕子「昔の四季の行事」(『ふる里のむかし　昭和 56 年度卒業記念郷土学習（第 2 集）』pp.35-38、北中山小学校、1981）
佐々木規彰「落井に古くからある行事研究」(『ふる里のむかし　昭和 56 年度卒業記念郷土学習（第 2 集）』pp.20-25、北中山小学校、1981）
宝賀崇子「上戸ノロのもちまきとあみだどう祭り」(『ふる里のむかし　昭和56年度卒業記念郷土学習（第2集）』pp.5-9、北中山小学校、1981）
朝比奈威夫「越前地方の民俗と芸能」(『月刊歴史手帖』10(4)　pp.24-29、名著出版、1982）
三輪信一「おこない」(『広報さばえ』(356) p.8、1982）
池田庄治郎「「澤」の部落」(『ふるさと』(4) pp.59-60、鯖江市老人クラブ連合会、1983）
正弥正廣『あわたべ抄史　男大迹部の里』(粟田部壮年グループ連絡協議会文化部、1984）
竹内祐夫「川島の蓬莱祀餅まき」(『ふるさと鯖江』(5) pp.99-100、鯖江市老人クラブ連合会、1984）
ふるさと赤坂の歩み編集委員会『ふるさと赤坂の歩み』（赤坂公民館、1985）
岸塚みゆき「二月十一日くだしのもちまき」(『ふくま』(15)　p.7、服間小学校・服間校 PTA、1987）
池田清美「もちまき」(『ふくま』(15)　p.32、服間小学校・服間校 PTA、1987）
杉本伊佐美「鯖江市河和田地区の年中行事」(『ふるさと鯖江』(9) pp.63-67、鯖江市老人クラブ連合会、1987）
斉藤槻堂「福井県内の年中行事（一）」(『若越』(67) pp.7-12、1989）
今立町仲山区 50 年史編纂委員会編『今立町仲山区 50 年史』(今立町仲山区 50 周年記念事業実行委員会、1990）
田中幸「お祈りと長兵衛さん」(『ふるさと鯖江』(12) pp.44-49、鯖江市老人クラブ連合会、1990）
福井県神社庁編『御大典記念　福井県神社誌』(福井県神社庁、1994）
ふるさと立待編さん委員会編『ふるさと立待』(鯖江市立待公民館、1994）
ふる里四方谷編纂委員会編（『ふる里　四方谷』四方谷公民館、1995）
杉本伊佐美「鯖江市河和田地区の餅撒き行事」(『若越郷土研究』41 (5) pp.84-87、福井県郷土誌懇談会、1996）
齋藤武「ふるさとの伝統行事　加多志波神社の「おこない」について」(『ふる里鯖江』(20) pp.117-120、鯖江市老人クラブ連合会、1998）
齋藤武「ふるさとの伝統行事　加多志波神社の「おこない」について【その二】」(『ふる里鯖江』(21) pp.149-15、鯖江市老人クラブ連合会、1999）
中島誠一「おこない」(『日本民俗大辞典（上）』pp.255-256、吉川弘文館、1999）
ふるさとかたりべ協議会（岡本地域）編『おかもとかたりべ』(岡本公民館、1999）
高橋正成「もちまき」(『ふくま』、(29) p.20、服間小学校・服間校 PTA、 2000）
五十嵐美弥「もちまき」(『ふくま』 (29)　p.37、服間小学校・服間校 PTA、2000）
いちはしともき「もちまき」(『ふくま』(30) p.1、服間小学校・服間校 PTA、2001）

福井県教育委員会編『都道府県別日本の民俗分布地図集成（第 6 巻）』「福井県民俗分布図」、東洋書林、2001）
市橋友樹「もちまき」（『ふくま』（32）p.15、服間小学校・服間校 PTA、2003）
八石区史委員会編『区の歴史を知ろう　VOL.2　謂れと信仰』（八石区史委員会、2003）
いまだての歴史編集委員会・今立町校長会『小学校社会科副読本「いまだての歴史」』（今立町教育委員会、2004）
うのあかね「もちひろい」（『ふくま』（33）p.1、服間小学校・服間校 PTA、2004）
NPO 法人河和田夢グリーン編『河和田むかしむかし』（NPO 法人河和田夢グリーン、2004）
渡邊光一「よこずみ　白山神社（横住）」（『残したい伝えたいふるさと服間』pp.6-7、服間ふるさとかたりべ会、2005）
為永幸高「堂屋敷（清根）」（『残したい伝えたいふるさと服間』pp.8-9、服間ふるさとかたりべ会、2005）
武安義郎「祈年祭（厄除）（室谷）」（『残したい伝えたいふるさと服間』p.37、服間ふるさとかたりべ会、2005）
長谷川保「大谷区の「おこない」」（『残したい伝えたいふるさと服間』pp.37-38、服間ふるさとかたりべ会、2005）
為永幸高「堂の講（おこない）とばんもち」（『残したい伝えたいふるさと服間』p.39、服間ふるさとかたりべ会、2005）
歴史・ロ碑グループ編『河和田の昔ばなし』（うるしの里づくり協議会、2006）
国定修「旧正月の奇習行事」（『残したい伝えたいふるさと服間』p.41、服間ふるさとかたりべ会、2005）
全日本郷土芸能協会編『日本の祭り文化事典』（東京書籍、2006）
ふくい伝統文化活性化事業実行委員会編『鯖江のオコナイ』（福井県教育庁文化課、2011）
宇野雅之・鈴木雅史・峯森記子「堂の餅と蓬莱祀」（『かっきょういーよ』pp.23-30、越前市花筐自治振興会、2012）
鯖江市役所秘書広報課編「おこない」（『広報さばえ』（728）pp.2-3、2013）
深川義之「加多志波神社のおこない神事」（『福井県の祭り・行事』pp.117-120、福井県教育委員会、2015）
『福井新聞』web 版　2012 年 1 月 16 日「八幡神社で伝統行事のもちまき　厄年住民、幸せ願う」
『福井新聞』web 版　2012 年 2 月 9 日「無病息災願い、団子奪い合う　粟島神社で伝統行事「だんごまき」」